

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第52集

# 二川古窯址群(1)

—豊橋市総合動植物公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—



2000年3月

豊橋市教育委員会

ふた がわ こ よう し ぐん  
二川古窯址群 (1)

—豊橋市総合動植物公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

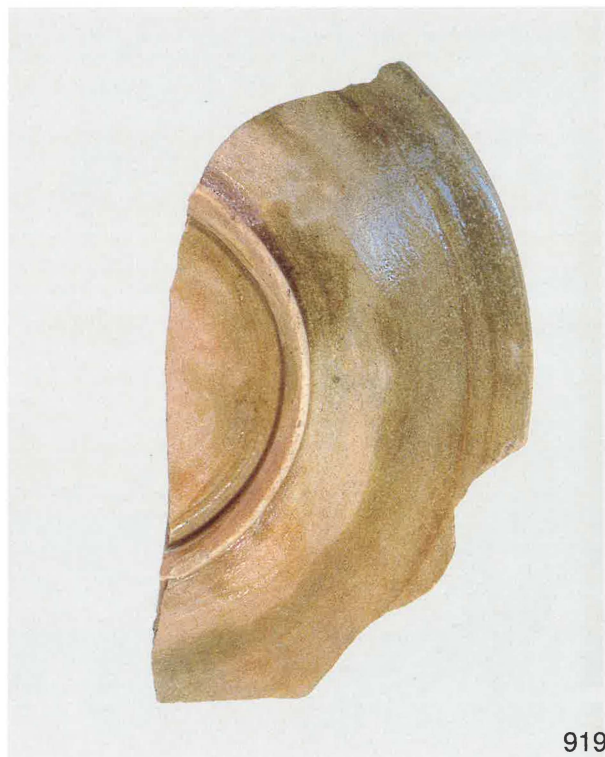
2000年3月

豊橋市教育委員会

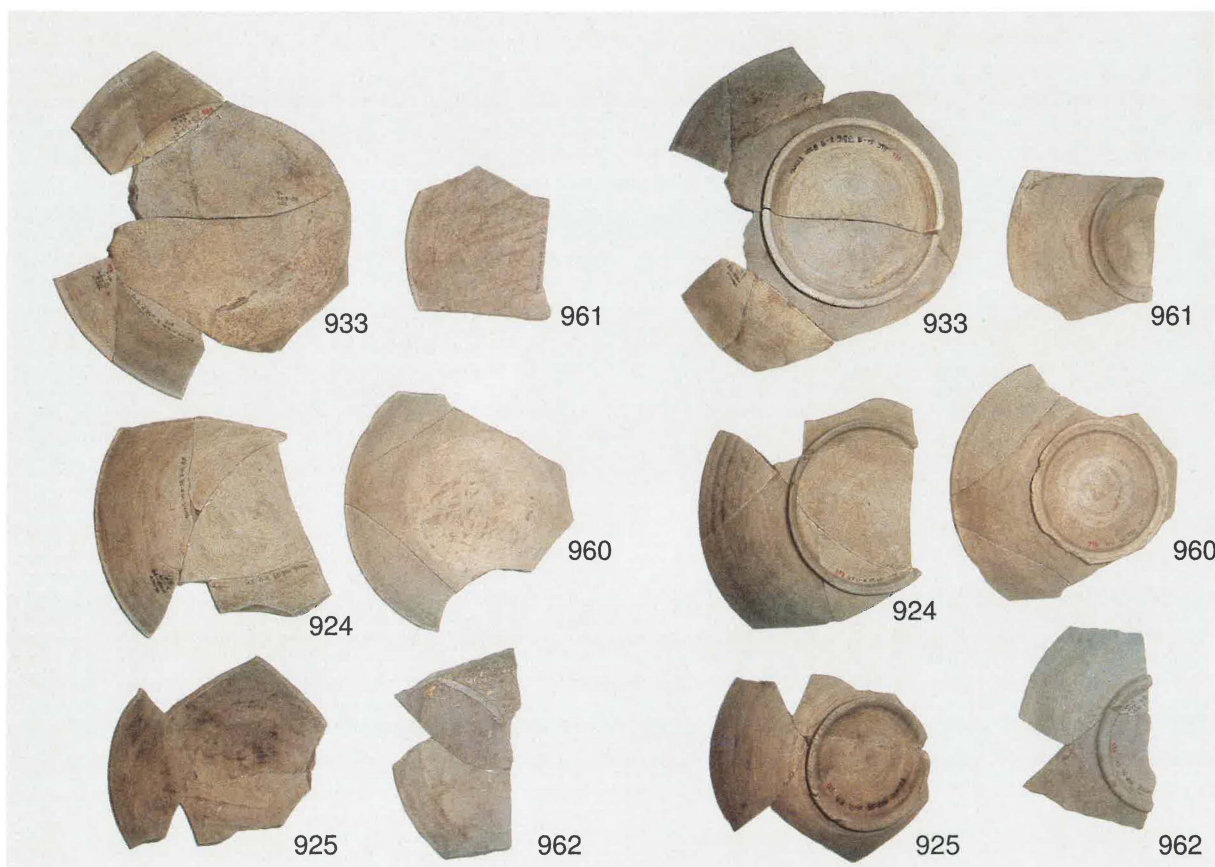




苗畑 5 号窯全景



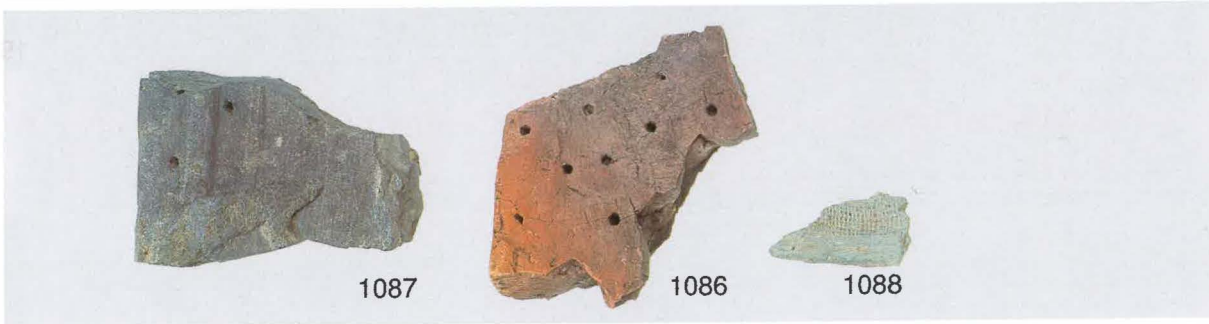
緑釉陶器段皿（苗畑5号窯）



緑釉陶器素地（苗畑5号窯）



1085



1087

1086

1088

鬼瓦・丸瓦（苗畑5号窯）



4号窯出土遺物



5号窯出土遺物



6号窯出土遺物

## 例 言

1. 本書は愛知県豊橋市大岩町字大穴1-238他において、豊橋市総合動植物公園建設に伴い事前に行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査は昭和60年度から平成5年度までに、第1～5次の試掘調査、A・B地点の発掘調査、苗畑1～6号窯および大沢A-2号窯の7基の窯跡の発掘調査を行った。報告書は以下のように3冊に分割して刊行する予定である。

第1分冊 二川古窯址群（Ⅰ）：苗畑4～6号窯

第2分冊 二川古窯址群（Ⅱ）：苗畑1～3号窯、A・B地点、試掘調査

第3分冊 二川古窯址群（Ⅲ）：大沢A-2号窯及びまとめ

2. 発掘調査は豊橋市教育委員会、及び豊橋市から委託を受けた豊橋遺跡調査会が行い、豊橋市教育委員会が調査の指導に当たった。すべての調査、及び指導は贅元洋（豊橋市美術館）が行った。

3. 発掘作業及び整理作業については、地元の方々のご協力をいただいた。また、報告書作成に当たり、遺構・遺物の実測・トレース等については山本絢子・氏原久枝・大川絵里・河合厚子・宮道美由紀各氏の援助を受けた。また、写真撮影については贅が行った。

4. 本書の執筆は第5章を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、これ以外の執筆及び編集は贅が行った。第5章は提出されたものにタイトル番号を付加し、地区名、遺構名、層位等を報告書の番号に統一した以外は、原文のまま掲載している。なお、実測図版と写真図版の遺物番号は対応している。

5. 開発地全体に渡る調査区の設定は現地の道路方向に合わせ任意に行った。各窯跡の発掘は窯体の主軸を中心線として、それぞれ独自に設定した。調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書で使用した方位はこの座標に沿うものである。

苗畑4・5号窯に関しては、地形図・窯体実測図等の作成、航空写真撮影等については、(株)フジヤマに委託して行った。

6. 本調査に当たって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管・管理している。

7. 本報告書作成に当たり、以下の方々から資料の提供・御教示をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

浅田員由（愛知県陶磁資料館）、石川明弘、尾野善裕（京都国立博物館）、久野正博（浜北市教育委員会）、斎藤孝正（文化庁）、城ヶ谷和弘（豊田南高校）、鈴木敏則（浜松市教育委員会）、檜崎彰一（愛知県陶磁資料館）、藤澤良祐（瀬戸市教育委員会）（敬称略・五十音順）



# 目 次

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	4

## 第2章 調査の経過

1. 調査の経過	8
2. 調査の方法	8

## 第3章 遺構

1. 4号窯	
A. 窯体の構造	11
B. 灰原の構造	16
C. 遺物出土状況	16
2. 5号窯	
A. 窯体の構造	18
B. 窯体構築の方法	18
C. 灰原の構造	19
D. 灰原の形成過程	20
E. 遺物出土状況	20
3. 6号窯	
A. 窯体の構造	32
B. 窯体構築の方法	33
C. 灰原の構造	33
D. 遺物出土状況	38

## 第4章 出土遺物

1. 出土遺物の分類	
A. 灰釉陶器	41
B. 緑釉陶器	42
C. 緑釉陶器素地	43
D. 須恵器	43
E. 土師器	44
F. 土製品	44

2. 4号窯出土遺物	
A. 灰釉陶器 .....	58
B. 須恵器 .....	58
3. 5号窯出土遺物	
A. 灰釉陶器 .....	62
B. 緑釉陶器 .....	94
C. 緑釉陶器素地 .....	94
D. 須恵器 .....	96
E. 土師器 .....	103
F. 土製品 .....	103
4. 6号窯出土遺物	
A. 灰釉陶器 .....	107
B. 須恵器 .....	114
第5章 自然科学分析	
1. 苗畑古窯出土炭化材の樹種同定 .....	166
報告書抄録 .....	172

## 挿 図 目 次

第1図	周辺地形図 (1/20,000・明治23年測量) .....	2
第2図	周辺地形図 (1/25,000) .....	2
第3図	周辺地形図 (1/10,000) .....	3
第4図	周辺地形復元図 (1/10,000) .....	3
第5図	周辺遺跡分布図 (1/20,000) .....	5
第6図	調査区配置図 (1/5,000) .....	10
第7図	窯体名称図 .....	11
第8図	4号窯発掘区全体図 (1/200) .....	12
第9図	4号窯全体図 (1/50) .....	13
第10図	4号窯窯壁・床面状況図 (1/40) .....	14
第11図	4号窯窯壁・断面図 (1/40) .....	15
第12図	4号窯窯体内遺物出土状況 (1/40) .....	17
第13図	5号窯灰原断面図-1 (1/200・1/60) .....	21
第14図	5号窯灰原断面図-2 (1/60) .....	22
第15図	5号窯灰原断面図-3 (1/60) .....	23
第16図	5号窯灰原完掘図 (1/100) .....	24
第17図	5号窯周辺地形図 (1/200) .....	25
第18図	5号窯調査区位置図 (1/100) .....	27
第19図	5号窯平面図 (1/40) .....	29
第20図	5号窯窯体内遺物出土状況 (1/40) .....	31
第21図	6号窯発掘区全体図 (1/50) .....	34
第22図	6号窯平面図 (1/40) .....	35
第23図	6号窯側面・断面図 (1/40) .....	36
第24図	6号窯灰原断面図 (1/50) .....	37
第25図	6号窯窯体内遺物出土状況 (1/40) .....	39
第26図	灰釉陶器小器種一覧図-1 .....	46
第27図	灰釉陶器小器種一覧図-2 .....	49
第28図	緑釉陶器・緑釉陶器素地、須恵器小器種一覧図-1 .....	52
第29図	須恵器小器種一覧図-2 .....	55
第30図	須恵器・土師器・土製品小器種一覧図 .....	57
第31図	4号窯出土遺物-1 (1/3) .....	59
第32図	4号窯出土遺物-2 (1/3) .....	60
第33図	5号窯出土遺物-1 (1/3) .....	65
第34図	5号窯出土遺物-2 (1/3) .....	66
第35図	5号窯出土遺物-3 (1/3) .....	67
第36図	5号窯出土遺物-4 (1/3) .....	68
第37図	5号窯出土遺物-5 (1/3) .....	69
第38図	5号窯出土遺物-6 (1/3) .....	70

第39図	5号窯出土遺物-7 (1/3)	71
第40図	5号窯出土遺物-8 (1/3)	72
第41図	5号窯出土遺物-9 (1/3)	73
第42図	5号窯出土遺物-10 (1/3)	74
第43図	5号窯出土遺物-11 (1/3)	75
第44図	5号窯出土遺物-12 (1/3)	76
第45図	5号窯出土遺物-13 (1/3)	77
第46図	5号窯出土遺物-14 (1/3)	78
第47図	5号窯出土遺物-15 (1/3)	79
第48図	5号窯出土遺物-16 (1/3)	80
第49図	5号窯出土遺物-17 (1/3)	81
第50図	5号窯出土遺物-18 (1/3)	82
第51図	5号窯出土遺物-19 (1/3)	83
第52図	5号窯出土遺物-20 (1/3)	84
第53図	5号窯出土遺物-21 (1/3)	85
第54図	5号窯出土遺物-22 (1/3)	86
第55図	5号窯出土遺物-23 (1/3)	87
第56図	5号窯出土遺物-24 (1/3・1/4)	88
第57図	5号窯出土遺物-25 (1/4)	89
第58図	5号窯出土遺物-26 (1/4)	90
第59図	5号窯出土遺物-27 (1/4)	91
第60図	5号窯出土遺物-28 (1/4)	92
第61図	5号窯出土遺物-29 (1/4・1/3)	93
第62図	5号窯出土遺物-30 (1/3)	95
第63図	5号窯出土遺物-31 (1/3)	97
第64図	5号窯出土遺物-32 (1/3)	98
第65図	5号窯出土遺物-33 (1/3)	100
第66図	5号窯出土遺物-34 (1/3)	101
第67図	5号窯出土遺物-35 (1/4・1/3)	102
第68図	5号窯出土遺物-36 (1/4)	104
第69図	5号窯出土遺物-37 (1/4・1/3)	105
第70図	5号窯出土遺物-38 (1/4・1/2)	106
第71図	6号窯出土遺物-1 (1/3)	109
第72図	6号窯出土遺物-2 (1/3)	110
第73図	6号窯出土遺物-3 (1/3)	111
第74図	6号窯出土遺物-4 (1/3)	112
第75図	6号窯出土遺物-5 (1/3)	113
第76図	6号窯出土遺物-6 (1/3・1/4)	115
第77図	6号窯出土遺物-7 (1/4)	116
第78図	6号窯出土遺物-8 (1/3・1/4・1/8)	117

## 挿 表 目 次

第1表	発掘調査一覧表	9
第2表	主要器種一覧表	41
第3表	小器種一覧表	45
第4表	4号窯出土碗・皿類径高グラフ	61
第5表	5号窯出土碗・皿類径高グラフ	63
第6表	6号窯出土碗・皿類径高グラフ	108
第7表	碗類他遺物観察表	120
第8表	壺類遺物観察表	160
第9表	苗畑古窯出土炭化材樹種同定結果-1 (NEB: 苗畑)	167
第10表	苗畑古窯出土炭化材樹種同定結果-2 (NEB: 苗畑OSW: 大沢A)	168
第11表	苗畑古窯出土炭化材樹種構成	168
第12表	湖西窯 (山口・千野、1990) と二川窯 (当窯跡) の燃料材比較	170

## 写 真 図 版 目 次

図版1	5号窯全景	
図版2-1	4・6号窯遠景	2
図版3-1	4号窯検出状況	2
	3 4号窯西半遺物出土状況	
図版4-1	4号窯窯体内東半窯壁出土状況-1	2
	3 4号窯窯体内東半遺物出土状況-1	4
	5 4号窯窯体内西半窯壁出土状況-1	6
	7 4号窯窯体内西半遺物出土状況-1	8
図版5-1	4号窯窯体内土層断面	2
	3 4号窯床面	
図版6-1	4号窯東灰原断面	2
図版7	4号窯完掘	
図版8-1	5号窯遠景	2
図版9-1	5号窯窯体上半遺物出土状況-1	2
図版10-1	5号窯窯体上半右壁	2
図版11-1	5号窯煙出し (下から)	2
図版12-1	5号窯下半 (焚口から)	2
図版13-1	5号窯分焰柱	2
図版14-1	5号窯燃焼室左壁-1	2
図版15-1	5号窯燃焼室右壁-1	2
図版16-1	5号窯燃焼室上半遺物出土状況-1	2
	2 4号窯遠景	
	2 4号窯東半遺物出土状況	
	2 4号窯窯体内東半窯壁出土状況-2	
	4 4号窯窯体内東半遺物出土状況-2	
	6 4号窯窯体内西半窯壁出土状況-2	
	8 4号窯窯体内西半遺物出土状況-2	
	2 4号窯左壁	
	2 4号窯灰原	
	2 5号窯窯体内窯壁出土状況	
	2 5号窯窯体上半遺物出土状況-2	
	2 5号窯窯体上半左壁	
	2 5号窯煙出し (上から)	
	2 5号窯焼成室	
	2 5号窯焚口	
	2 5号窯焼成室左壁-2	
	2 5号窯焼成室右壁-2	
	2 5号窯焼成室上半遺物出土状況-2	

	3	5号窯燃焼室下半遺物出土状況-1	4	5号窯焼成室下半遺物出土状況-2
	5	5号窯焚口付近遺物出土状況-1	6	5号窯焚口付近遺物出土状況-2
図版17		5号窯完掘状況		
図版18-1	5	5号窯B-12~14区遺物出土状況	2	5号窯B-16~18区遺物出土状況
	3	5号窯B-12区遺物出土状況	4	5号窯B-13区遺物出土状況
	5	5号窯B-14区遺物出土状況	6	5号窯B-16区遺物出土状況
図版19-1	5	5号窯D-12~14区遺物出土状況	2	5号窯D-16~18区遺物出土状況
図版20-1	5	5号窯C-16区遺物出土状況-1	2	5号窯C-16区遺物出土状況-2
	3	5号窯C-17区遺物出土状況-1	4	5号窯C-17区遺物出土状況-2
	5	5号窯D-14区遺物出土状況	6	5号窯D-16区遺物出土状況
	7	5号窯D-17区遺物出土状況	8	5号窯D-18区遺物出土状況
図版21-1	5	5号窯E~G-16・17区遺物出土状況(北から)		
	2	5号窯E~G-16・17区遺物出土状況(西から)		
図版22-1	5	5号窯E・F-16~18区遺物出土状況(北から)		
	2	5号窯E・F-16~18区遺物出土状況(西から)		
	3	5号窯E-16区遺物出土状況-1	4	5号窯E-17区遺物出土状況-2
	5	5号窯E-18区遺物出土状況	6	5号窯F-16区遺物出土状況
	7	5号窯F-17区遺物出土状況	8	5号窯F-18区遺物出土状況
図版23		5号窯B~D-12~18区灰原断面(北から)		
図版24-1	5	5号窯灰原完掘状況(北から)	2	5号窯灰原断面(東から)
図版25-1	5	5号窯灰原断面(北から)	2	5号窯SK-1・3完掘状況-1(西から)
図版26-1	5	5号窯SK-1・3完掘状況-2	2	5号窯SK-1完掘状況(近景)
	3	5号窯SK-3完掘状況(近景)		
図版27-1	5	5号窯SK-2完掘状況-1(西から)	2	5号窯SK-2完掘状況-2(北から)
	3	5号窯SK-2完掘状況-3(近景)		
図版28-1	6	6号窯調査区全体-1(北から)	2	6号窯調査区全体-2(西から)
図版29-1	6	6号窯完掘状況-1(北から)	2	6号窯完掘状況-2(西から)
図版30-1	6	6号窯左壁-1(西から)	2	6号窯左壁-2(北から)
	3	6号窯左壁-3(西から)		
図版31-1	6	6号窯右壁-1(西から)	2	6号窯右壁-2(北から)
	3	6号窯右壁-3(西から)		
図版32-1	6	6号窯窯体内遺物出土状況(北から)	2	6号窯焚口遺物出土状況(東から)
	3	6号窯焼成室遺物出土状況(西から)		
図版33-1	6	6号窯灰原C~E-5・6区遺物出土状況(北から)		
	2	6号窯灰原D-5区遺物出土状況(東から)		
	3	6号窯灰原D-6区遺物出土状況(東から)		
図版34-1	6	6号窯灰原D~F-5・6区遺物出土状況(北から)		
	2	6号窯灰原E-5・6区遺物出土状況(東から)		
	3	6号窯灰原F-5区遺物出土状況(北から)		
図版35-1	6	6号窯窯体内土層断面A-A'ライン(北から)		
	2	6号窯窯体内土層断面B-B'ライン(北から)		

- 3 6号窯窯体内土層断面C-C'ライン(北から)
- 図版36-1 6号窯床面断ち割り状況 2 6号窯焼成室床面断ち割り状況-1  
3 6号窯焼成室床面断ち割り状況-2
- 図版37-1 6号窯前庭部断ち割り状況-1 2 6号窯前庭部断ち割り状況-2  
3 6号窯焼成室床面断ち割り状況-1 4 6号窯焼成室床面断ち割り状況-2  
5 6号窯焼成室左側壁断ち割り状況 6 6号窯焼成室左側壁断ち割り状況(近景)  
7 6号窯焼成室右側壁断ち割り状況 8 6号窯焼成室右側壁断ち割り状況(近景)
- 図版38-1 6号窯灰原断ち割り状況 2 西壁断面
- 図版39-1 6号窯灰原D-5区断ち割り断面(東から)  
2 6号窯灰原C-6区断ち割り断面(北東から)
- 図版40 4号窯出土遺物-1  
図版41 4号窯出土遺物-2  
図版42 5号窯出土遺物-1  
図版43 5号窯出土遺物-2  
図版44 5号窯出土遺物-3  
図版45 5号窯出土遺物-4  
図版46 5号窯出土遺物-5  
図版47 5号窯出土遺物-6  
図版48 5号窯出土遺物-7  
図版49 5号窯出土遺物-8  
図版50 5号窯出土遺物-9  
図版51 5号窯出土遺物-10  
図版52 5号窯出土遺物-11  
図版53 5号窯出土遺物-12  
図版54 5号窯出土遺物-13  
図版55 5号窯出土遺物-14  
図版56 5号窯出土遺物-15  
図版57 6号窯出土遺物-1  
図版58 6号窯出土遺物-2  
図版59 6号窯出土遺物-3  
図版60 6号窯出土遺物-4  
図版61 苗畑古窯出土炭化材樹種-1  
図版62 苗畑古窯出土炭化材樹種-2

# 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

## 1. 遺跡の立地

豊橋市は中央構造線沿いに流れる豊川左岸の下流部に位置する。市の東部には赤石山脈の末端である弓張山地が連なっている。南部は渥美半島の基部に当たり、高師原台地等の河岸段丘が広がり、太平洋に面している。西部は豊川河口部で沖積地・干拓地が広がり、三河湾に面している。市域の大部分は豊川と旧天竜川の河岸段丘及び沖積平野などの平坦地である。市域の大半を占める河岸段丘は高位面である天伯原面、中位面である高師原～豊橋上位面、低位面である豊橋面の3面に分類されている(註1)。

今回報告する苗畑4～6号窯は豊橋市南東部に分布する二川古窯址群のほぼ中央に位置している。二川古窯址群は弓張山地の末端にある松明峠の南西山麓に分布する平安時代の灰釉陶器を生産した窯跡群とされている(註2)。その分布範囲は市域東部を南北に延びる弓張山地の西麓から中位段丘面である豊橋面・高師原面、梅田川中流域右岸の高師原面と左岸の高位段丘面である天伯原面の段丘斜面に分布している。

遺跡周辺は明治時代にすでに御料林になっており、発掘当時は営林署の苗圃になっていた。苗圃のある段丘の斜面は三段になっており、斜面の間は広い平坦地になっていた。この平坦地は人為的に造られたもので、地形がかなり削平を受けて改変されたことを示している。

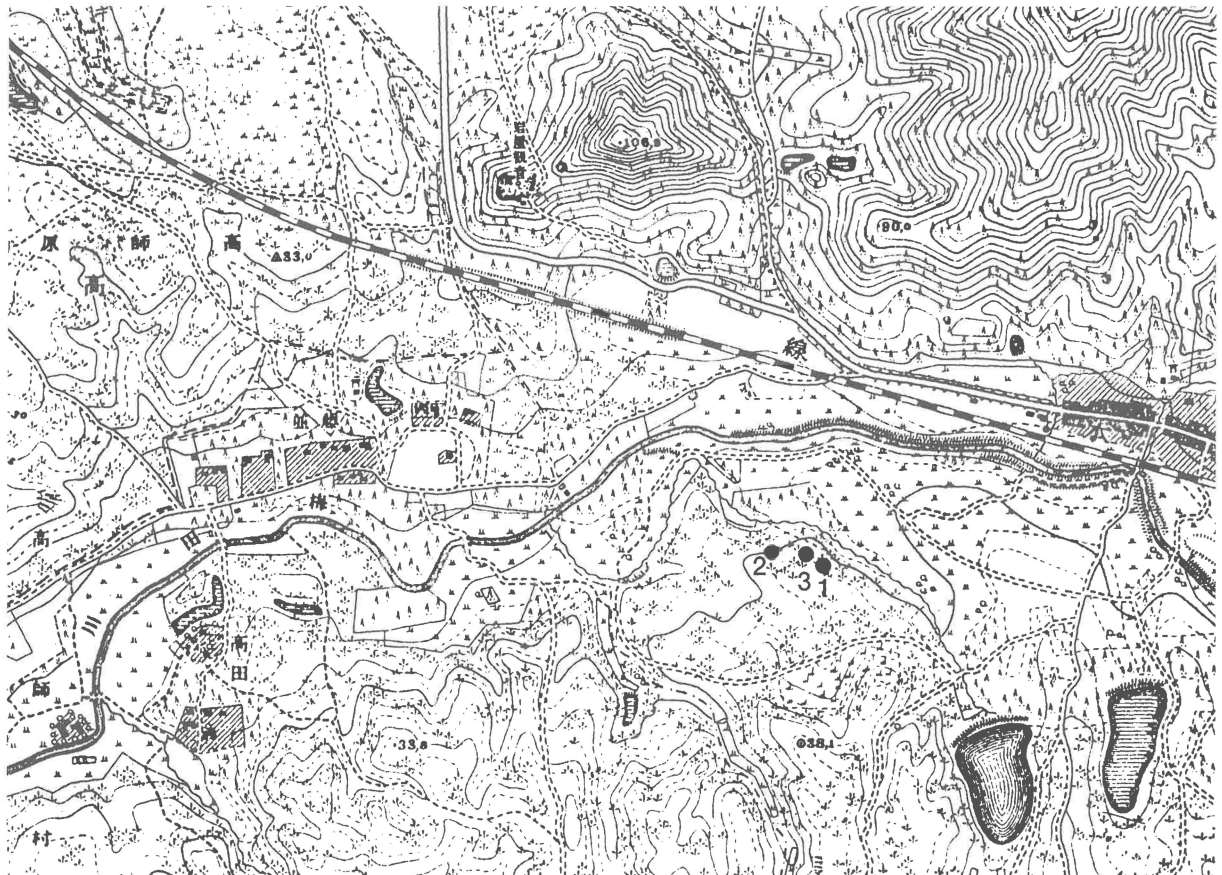
苗畑4～6号窯はこの段丘の最下段に位置しており、すぐ北側は梅田川の支流である権茂川に面している。また、苗畑5号窯の北西側は台地が削られ、権茂川は流路を変更されていることが分かる(第1～4図)。このように、遺跡周辺は大きく地形が変形しているが、段丘斜面上に立地するという点では、他の窯跡と同じである。

二川古窯址群の大半は南側にある梅田川沿いに東西に分布しており、製品の出荷に際して梅田川を中心とした水運が利用された可能性も考えられる。

註1 水野季彦 1990「第2章-1. 遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会

註2 歌川学 1973「第三節 平安時代の豊橋」『豊橋市史第1巻』豊橋市史編集委員会 216頁

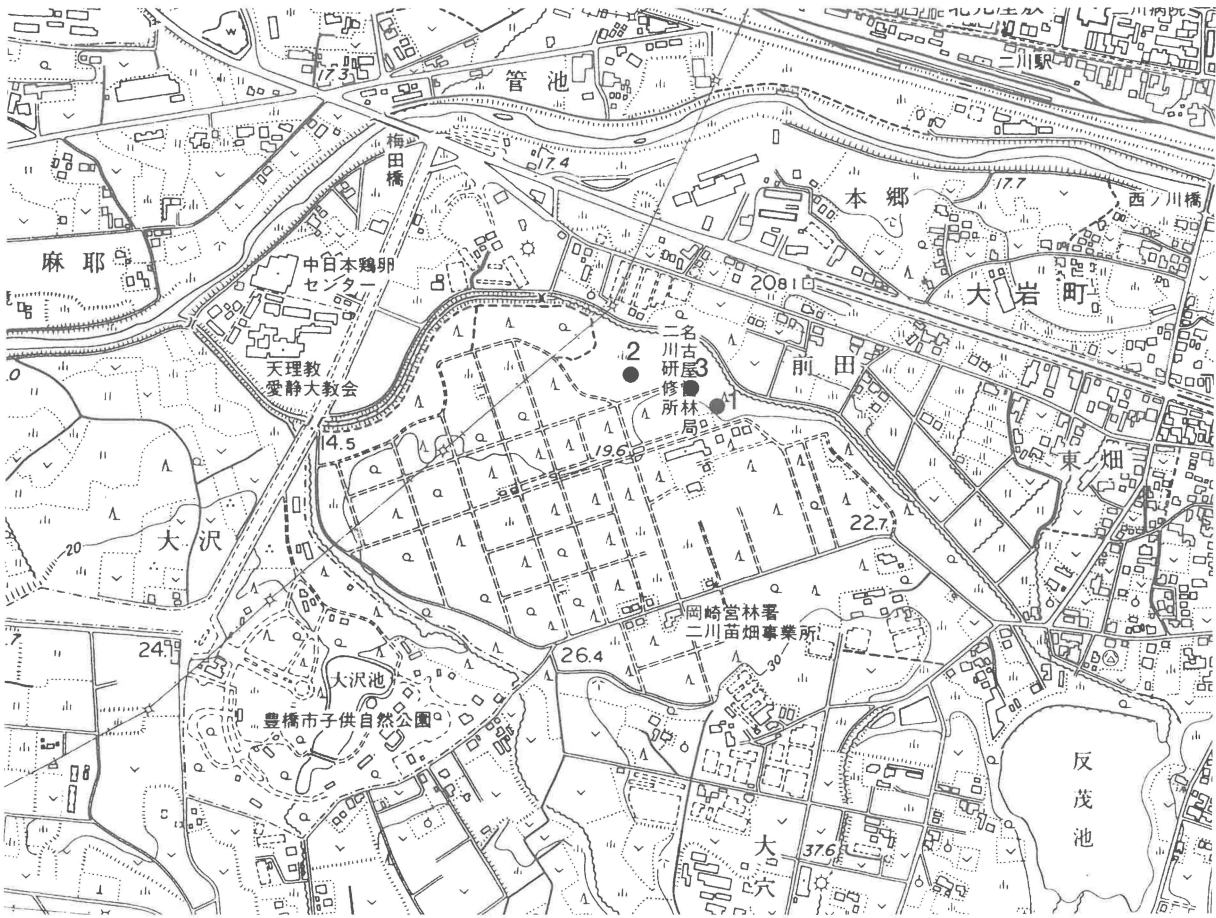




第1図 周辺地形図 (1/20,000・明治23年測量)



第2図 周辺地形図 (1/25,000)



第3図 周辺地形図 (1/10,000)



1 : 苗畑 4 号窯 2 : 苗畑 5 号窯 3 : 苗畑 6 号窯

第4図 周辺地形復元図 (1/10,000)

## 2. 歴史的環境

二川古窯址群のある二川地区は、近世東海道の宿場である二川宿を中心に豊橋市の南東部に位置している。今回報告する苗畑4～6号窯の周辺に分布する遺跡は、灰釉陶器窯跡、古墳がほとんどであり、集落等はあまり見つかっていない。以下では、二川古窯址群を中心に各時代の概説を行う。

### 縄文時代

遺跡分布図に示した範囲内では縄文時代の遺跡は知られていないが、2 Kmほど西には、東原遺跡、桜遺跡があり、発掘調査が行われている。

東原遺跡は天伯原面と呼ばれる高位段丘上に位置している。発掘調査は愛知大学考古学研究会によって行われ、早期の押型文土器や撚糸文土器、前期の土器が出土している（註1）。

桜遺跡は標高5～6 mの梅田川の沖積地上に位置している。中学校建設に伴い調査が行われ、範囲確認のための試掘調査で縄文土器等の遺物が出土した（註2）。縄文前期から晩期の土器や石器が出土しており、かなり長期間に渡って継続した遺跡である。また、調査区内からははっきりとした遺構は確認されず、流木も出土していることから、遺跡自体は調査地点の北東側にあるものと考えられる。

### 弥生時代

弥生時代も遺跡分布図に示した範囲内では遺跡は知られていなかったが、苗畑1号窯の調査で弥生土器の小片が出土した。まだ整理作業が進んでいないため詳細は不明であるが、混入の可能性もある。

縄文時代と同じように東原遺跡では弥生中期の土器が出土しており、竪穴住居や土壙が確認されている。

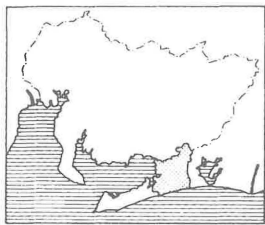
### 古墳時代

古墳時代では集落跡ははっきりと確認できなかったが、苗畑遺跡の試掘調査で土師器の壺等が出土しており、弥生時代終末から古墳時代前期のものと考えられる。

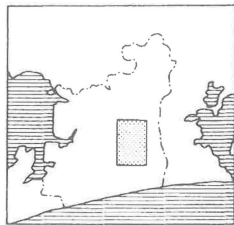
集落ははっきりしないが、二川地区には多数の古墳が築造されている。豊橋市の市域全体では、古墳は500基以上が確認されており、その大半が横穴式石室を持つ後期の群集墳である。これらの群集墳は市域の東を南北に延びる赤石山脈の山麓の南斜面に多く築造されている。

二川地区は豊橋市南東部の赤石山脈の南端に位置しており、古墳群としても最も南にある。二川地区にある古墳はほとんどが横穴式石室を持つ後期古墳で山脈の南側斜面に集中しているが、一部に山頂部に立地するものもある。

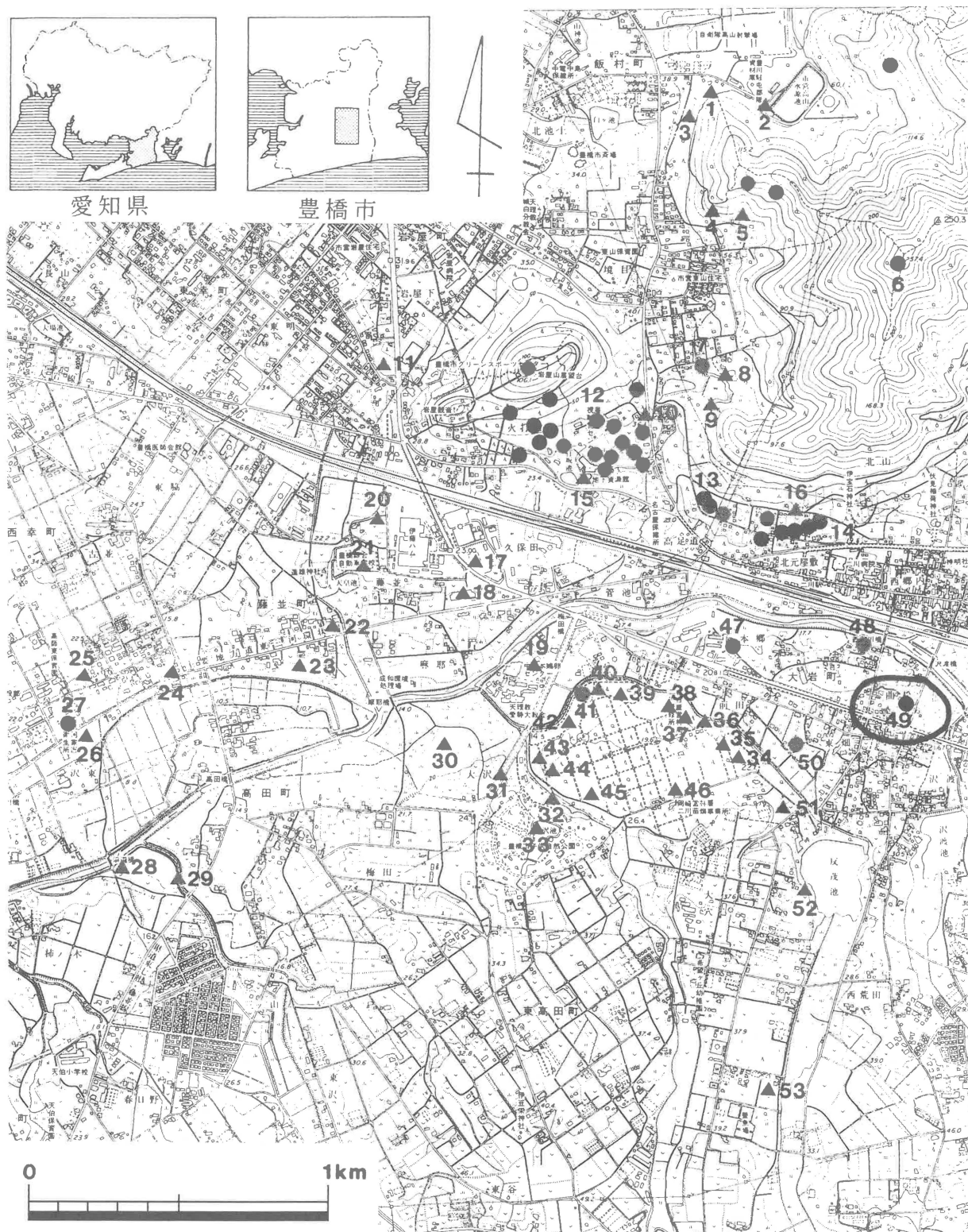
松明峠古墳（6）は標高250mの山頂にあり、横穴式石室を持つ円墳だったとされている。火打坂古墳群（12）は20基ほどの群集墳であり、横穴式石室の一部が露出しているものが多く見られる。火打坂11号墳は標高108mの山頂に位置している円墳だったとされている。火打坂古墳群の南東約500mには、総数10基程度の北山古墳群（13）・チャンチャカ山古墳群（16）があり、東名高速道路建設に伴い1962・1965年に発掘調査（註3）が行われており、いずれも円墳で主体部は横穴式石室とされている。



愛知県



豊橋市



- |            |             |            |            |            |            |
|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 高山1号窯   | 2. 高山2号窯    | 3. 北山3号窯   | 4. 北山2号窯   | 5. 北山1号窯   | 6. 松明峠古墳   |
| 7. 東山1号墳   | 8. 三ツ池2号窯   | 9. 三ツ池1号窯  | 10. 火打坂A古窯 | 11. 岩屋下古窯  | 12. 火打坂古墳群 |
| 13. 北山古墳群  | 14. 三ツ池山古墳群 | 15. 火打坂B古窯 | 16. 三ツ池山古窯 | 17. 久保田B古窯 |            |
| 18. 久保田A古窯 | 19. 久保田C古窯  | 20. 天王古窯   | 21. 天王池古窯  | 22. 摩耶A古窯  | 23. 摩耶B古窯  |
| 30. 八反田古窯  | 31. 大沢A1号窯  | 32. 大沢A2号窯 | 33. 大沢B古窯  | 34. 苗畑1号窯  | 35. 苗畑2号窯  |
| 36. 苗畑4号窯  | 37. 苗畑6号窯   | 38. 苗畑5号窯  | 39. 苗畑9号窯  | 40. 苗畑7号窯  | 41. 苗畑遺跡   |
| 42. 苗畑8号窯  | 43. 苗畑10号窯  | 44. 苗畑11号窯 | 45. 苗畑12号窯 | 46. 苗畑3号窯  | 47. 本郷遺跡   |
| 48. 北田遺跡   | 49. 曲松遺跡    | 50. 黒下遺跡   | 51. 大穴古窯   | 52. 反茂池1号窯 | 53. 荒田古窯   |

## 古代

古代では今回報告する苗畑4～6号窯の含まれる二川古窯址群がある。二川古窯址群は豊橋市南東部の山麓から丘陵地帯の南北約5km、東西約6kmの範囲に分布しており、平成11年3月時点で約80基が確認されている。豊橋市教育委員会では市域全体の詳細分布調査を継続しており、今後窯跡数が増加することが予想される。

二川古窯址群（以下二川窯と呼ぶ）は弓張山地（赤石山脈）末端にある松明峠の南西山麓に分布する平安時代の灰釉陶器を生産した窯跡群とされている（註4）。二川窯は9世紀第Ⅱ四半期頃、猿投窯からの技術移入により開窯し、11世紀頃まで継続している。初期の黒笹14号窯（K-14）段階の窯跡は4基が確認されており、二川窯では北半部分に点在している（註5）。これらのK-14段階の窯では、灰釉陶器以外にも須恵器が併焼されており、これらの須恵器は湖西窯ではなく、猿投窯の技術的特徴を示している。

二川窯では、これ以後継続して窯跡群が形成されるが、黒笹90号窯（K-90）段階の後半に窯跡数が増え、10世紀の折戸53号窯（O-53）段階が最も窯跡数が多いようである。11世紀の東山72号窯（H-72）段階まで生産は継続しているが、後続する百代寺窯段階の窯跡は確認されていない。これは、猿投窯編年の百代寺窯と同一型式と認定できる土器がないということであり、二川窯では百代寺段階の灰釉陶器生産が無く、生産が断絶しているということではない。それは、採集資料ではあるが、灰釉陶器碗と中世陶器碗の両者を出土する窯跡が新たに確認されており、猿投窯の百代寺段階に独自の型式が存在する可能性が指摘できるからである。また、消費地においても百代寺窯と同一型式の碗を出土する遺跡はほとんど見られないからである。

今回報告する苗畑支群は二川窯のほぼ中央部に位置している。苗畑支群ではK-90段階単独の窯はなく、O-53段階の遺物と共に出土しており、K-90段階の後半と考えられるが、この時期からH-72段階までの窯12基が推定されている。苗畑1～8号窯（34～38・42）は試掘調査で窯体あるいは灰原の存在が確認されているが、9～12号窯（39・43～45）は遺物が出土しているものの営林署の造成工事で二次的に動いている可能性があり、その存在を推定しているものである。生産された灰釉陶器は碗・皿・壺等の各種のものがあり、猿投窯の器種構成とほとんど同じである。

苗畑支群の北西約500mには、苗畑支群よりも先行する窯跡として、K-14段階の久保田A古窯（18）とK-90段階の岩屋下古窯（11）がある。久保田A古窯（18）は報告が無く、詳細は不明であるが、角高台の碗・皿類の他に、窯道具のサヤが出土したとされている。また、岩屋下古窯（11）では、底部ヘラケズリ調整で三日月高台、施釉はハケ塗りの碗・皿類や王冠状のトチが出土しており、K-90単独の段階と考えられる窯跡である。苗畑支群は南西側に密接してある大沢支群と共に久保田A古窯や岩屋下古窯に継続するようであり、同時期と考えられる窯跡数が増えている。

猿投窯や尾北窯等の灰釉陶器窯では、灰釉陶器だけではなく、須恵器も併焼されており、一部の窯では緑釉陶器も生産されていた。二川窯では、これまで灰釉陶器と須恵器は確認されていたが、今回報告する苗畑5号窯では緑釉陶器も生産されていたことが確認された（註6）。

## 中世・近世

苗畑支群北東の梅田川の微高地上を中心に、本郷・北田・曲松・黒下遺跡（47～50）があり、古代から近世頃の遺物が採集されている（註7）。出土遺物では中世陶器が主であり、遺跡自体は中世を中心とするようであるが、詳細ははっきりしていない。

これらの遺跡から梅田川を挟んだ対岸には近世東海道の二川宿があり、宿場町として栄えたところである。現在ある二川の集落は、苗畑支群の北側にある「本郷」あたりから移転した新しい集落であるという伝承もあり、新たに開発された地区である可能性もある。また、二川の市街地は緩やかな南向きの斜面であり、市街地の中でも灰釉陶器窯や遺跡がわずかに確認されている。地形的には古墳や窯跡が分布する所であり、宿場町としての開発に伴って壊されている可能性が考えられる。

註1 愛知大学考古学研究会 1979～1986『東原遺跡発掘調査概要』第1～8次

註2 豊橋市教育委員会 1989『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集 桜遺跡試掘調査報告書』

註3 愛知県教育委員会

註4 歌川學 1973「第二章古代 第三節平安時代の豊橋」『豊橋市史』第1巻 216頁

註5 贄元洋 1998「二川窯における灰釉陶器生産の出現過程」『三河考古』第11号

註6 贄元洋 1996「二川窯における緑釉陶器生産の展開」『三河考古』第9号

註7 加藤賢吾・原昌弘 1989「Ⅲ大岩南地区 3 遺跡と遺物の概要」『牛川西部・大岩南地区土地  
区画整理事業に伴う埋蔵文化財分布調査報告書』

## 第2章 調査の経過

### 1. 調査の経過

豊橋市総合動植物公園建設予定地内には、苗畑A-1～3号窯、苗畑B-1・2号窯、苗畑C-1・2号窯、苗畑D-1・2号窯、藤並大沢A-2・3号窯、藤並大沢B-1・2号窯の13基の窯跡があるとされていた（註1）。窯跡の分布はほぼ開発地全体に渡ることが予想されたので、工事計画に合わせ5カ年で試掘調査を行い、確認された遺跡のうち、工事に伴って破壊されるものを工事の進展に合わせて順次発掘調査する事になった。

試掘調査は昭和60年度から平成元年度まで行い、昭和61年度には遺構の存在が推定されたA・B地点、昭和62年度には苗畑1・2号窯、平成元年度には苗畑3号窯、平成5年度には苗畑4・5号窯、大沢A-2号窯、平成6年度には苗畑5・6号窯の発掘調査を行った。各調査の期間・面積等は第1表の通りである。なお、窯跡名については試掘調査の結果、これまで推定されていた位置や基数と著しく異なるため、苗畑支群については苗畑1～12号窯まで、号数で示すことにした。

開発予定地は調査当時岡崎営林署の苗圃になっていた。現地は縦横に道路が走り、畑の区画が整然と整備されており、地形は平らでかなり改変を受けていることは明らかであった。試掘調査は買収が終了した部分から順次行っていったが、調査の結果、開発地中央の畑部分は一部に遺物が出土する地点があり、窯跡が存在した可能性を指摘できるものもあったが、大規模な造成工事が行われており、一部を残してほとんど壊滅状態であった。

しかし、苗圃周縁部の権茂川沿いの段丘面は旧地形を残している部分が多く、新たに多数の窯跡が確認された。また、これまで窯跡があると推定されていた地点の多くで窯跡は確認できず、営林署の造成工事に伴って2次的に動いた土の中に土器が混入していたものと考えられる。

確認された窯跡はできる限り現地保存をすることを前提に工事計画との調整を行った。今回報告するのは平成5・6年度に調査を行った苗畑4～6号窯であり、4号窯については窯体部分のみ、5号窯については窯体と灰原の一部が現地保存されている。

註1 愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』

### 2. 調査の方法

調査を開始するに当たり、調査対象地全体に100m四方の大グリッドを設定した。地区名については東西方向がアルファベット、南北方向は数字で示すことにし、それぞれ西から東、北から南に向かって設定した（第6図）。具体的な設定にあたってはC-3区南東隅の交差点を中心杭として、東西南北が見渡せるように道路の方向に沿って任意に設定した。これは、苗圃に樹木の苗木が植えられており、見通しが利かなかったためである。試掘トレンチの名称は各大グリッドごとに1番から数字で示した（例：A-1区第1トレンチ）。

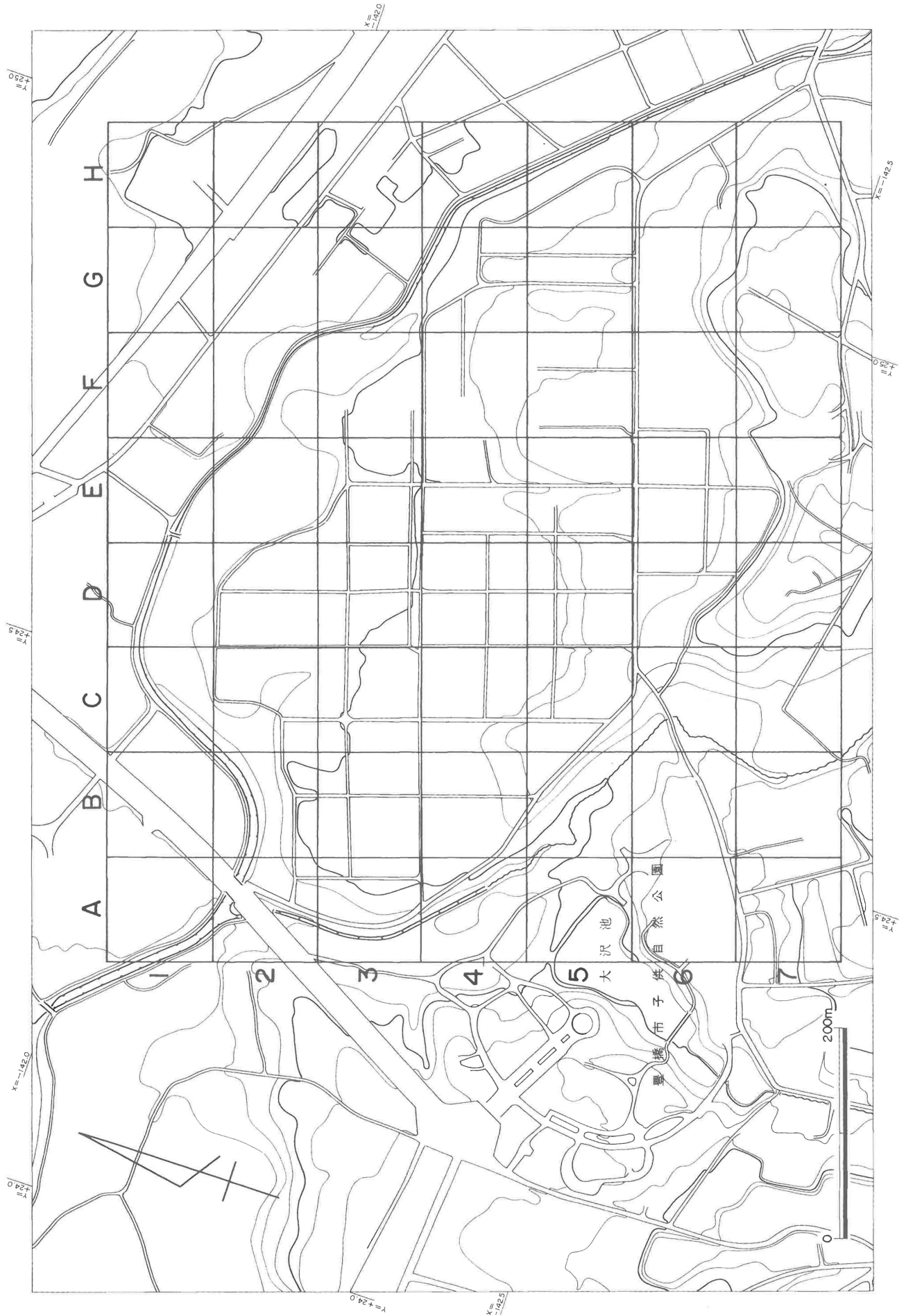
各地区の試掘調査は遺物の散布が見られるところ、駐車場、自然史博物館建設用地等で掘削により滅失する可能性が高いところを集中的に行い、できる限り全体に渡ってトレンチを設定した。試掘調査は苗が植えられていないところでは重機により、表土除去を行った。苗が植えられており重機が使用できないところは手作業で行った。

基本的な層位は表土層（畑の耕作土）が10～20cmあり、その直下は地山層であった。C-2区北西側のように谷地形と考えられるところの一部で厚く造成土が盛られているところもあったが、遺物包含層や旧表土はほとんど残存していなかった。これは、かなり大規模な造成工事がかつて行われ、旧地形が大きく改変されていたことを示している。特にB～E-3・4区あたりは極めて平坦に整地されており、明治時代以降の地図から読みとれる地形の改変（第1～4図）や、営林署開設にあたり山を崩して苗圃を造成したと言う、営林署職員からの伝聞と一致するものと考えられる。

第1表 発掘調査一覧表

調査年度	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	調査期間	調査内容
昭和60年度	3,000	贄 元洋	1985.12.17～1986. 4. 8	第1次試掘調査
昭和61年度	1,800	贄 元洋	1986. 6.26～1987. 2.28	第2次試掘調査 A・B地点発掘調査
昭和62年度	4,500	贄 元洋	1987.10.20～1988. 4.12	第3次試掘調査 苗畑1・2号窯発掘調査
昭和63年度	1,700	贄 元洋	1989. 1.10～1989. 3.30	第4次試掘調査
平成元年度	2,000	贄 元洋	1994.10.11～1995. 3.23	第5次試掘調査 苗畑3号窯発掘調査
平成5年度	2,500	贄 元洋	1993. 8.16～1994. 4.12	苗畑4・5号窯、大沢A-2号窯発掘調査
平成6年度	300	贄 元洋	1994.10.11～1995. 3.23	苗畑5・6号窯発掘調査
合計	15,800			



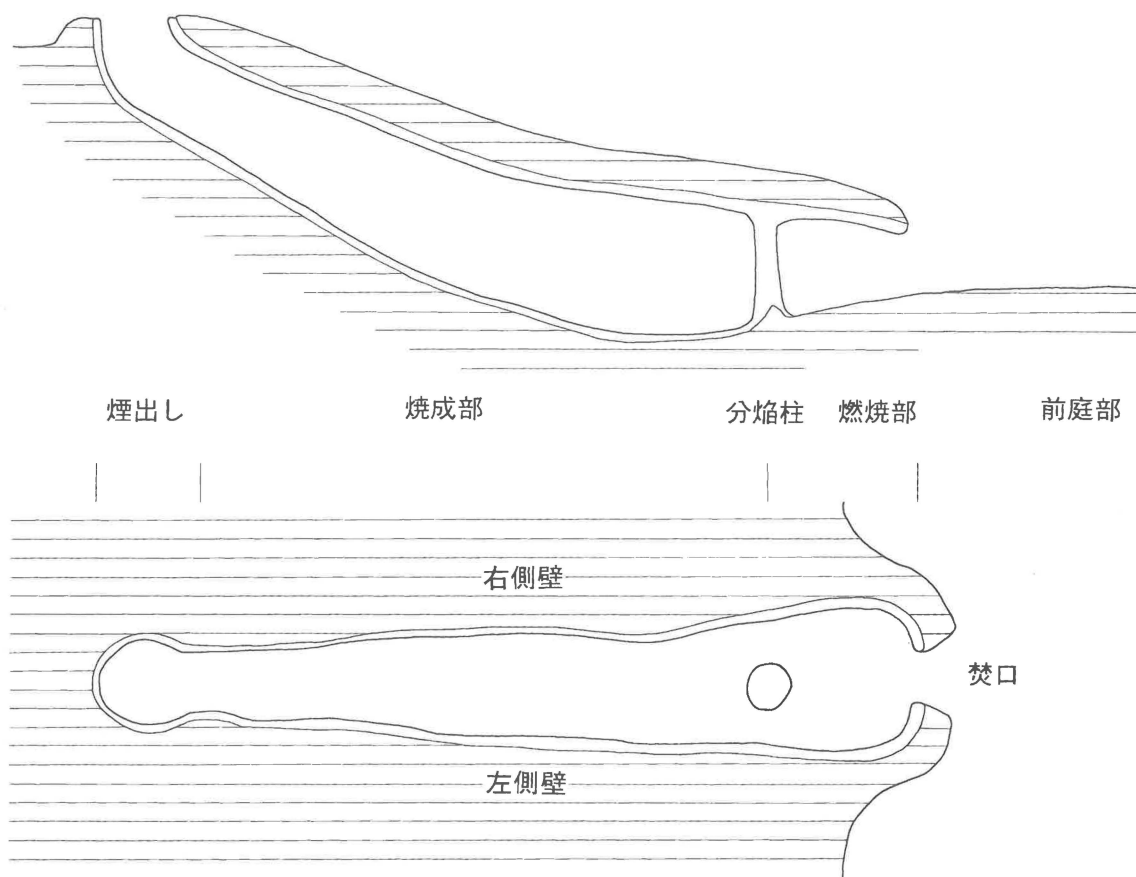


第6図 調査区配置図 (1/5,000)

## 第3章 遺 構

本章で説明するのは、苗畑4～6号窯の窯体構造、灰原、土壙等の窯跡を構成する各遺構である。窯体や灰原の構造は基本的に各窯ごとで大きな違いは見られないが、5号窯は窯体が焚口から煙りだしまで良好に残存しており、窯体の構築方法の復元が可能であった。

なお、窯体の各部分名称については、第7図のとおりである。また、長さとは水平長、高さは床からの垂直長である。左右は焚口から煙りだしを見た方向である。



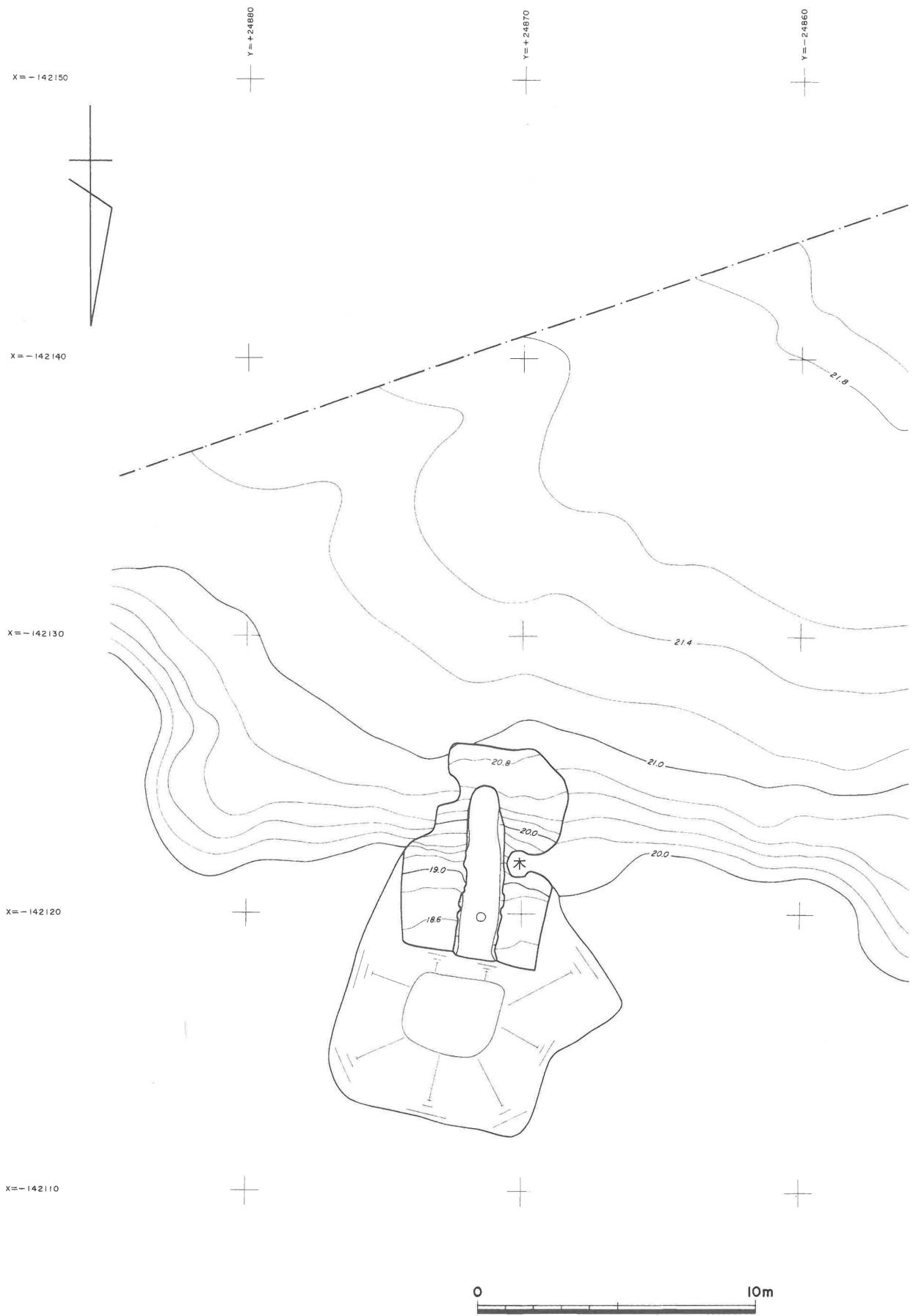
第7図 窯体名称図

### 1. 4号窯

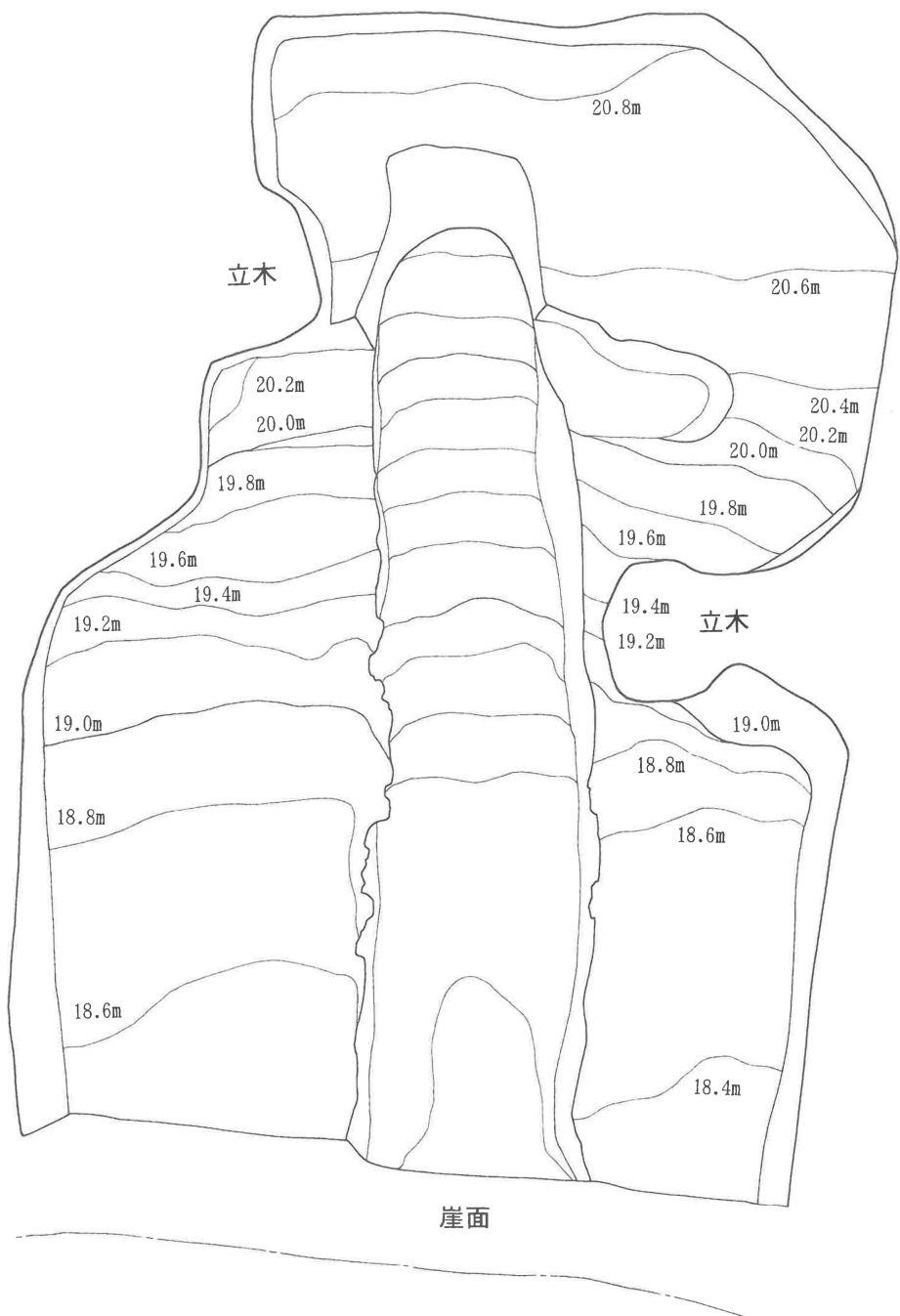
#### A. 窯体の構造 (第8～11図)

苗畑4号窯は権茂川左岸の最下段の段丘上に位置している。標高は煙りだし付近で約20mである。調査当時は窯体の半分程度まで公園の工事に伴う造成土で埋められていた。調査後は窯体部分を保存することになったので、断ち割りを行わず土層観察用のベルトを残したまま埋め戻した。

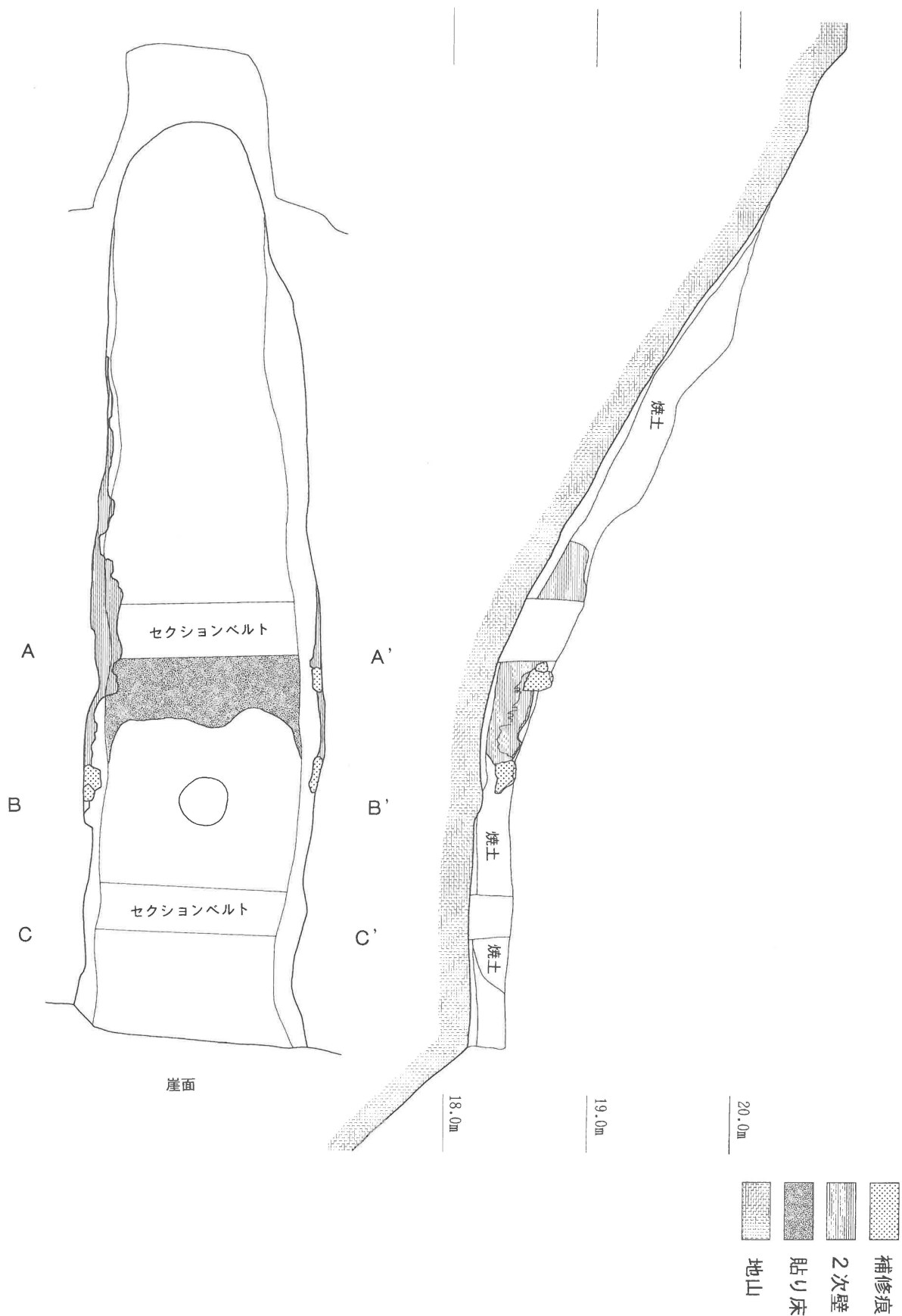
窯体は焚口付近で120cm程削り落とされ、その下の面は工事以前には水田であった。西側約20mにある苗畑6号窯でも同じように削り落とされており、水田造成に当たって造成されたものである可能性がある。煙だしも破壊されていたが、分焰柱の痕跡が残っていた。現状の残存長は642cm、高さは残りの良い左側壁で残存高約50cmである。幅は分焰柱のところでは140cm、最大幅は分焰柱から50cm程



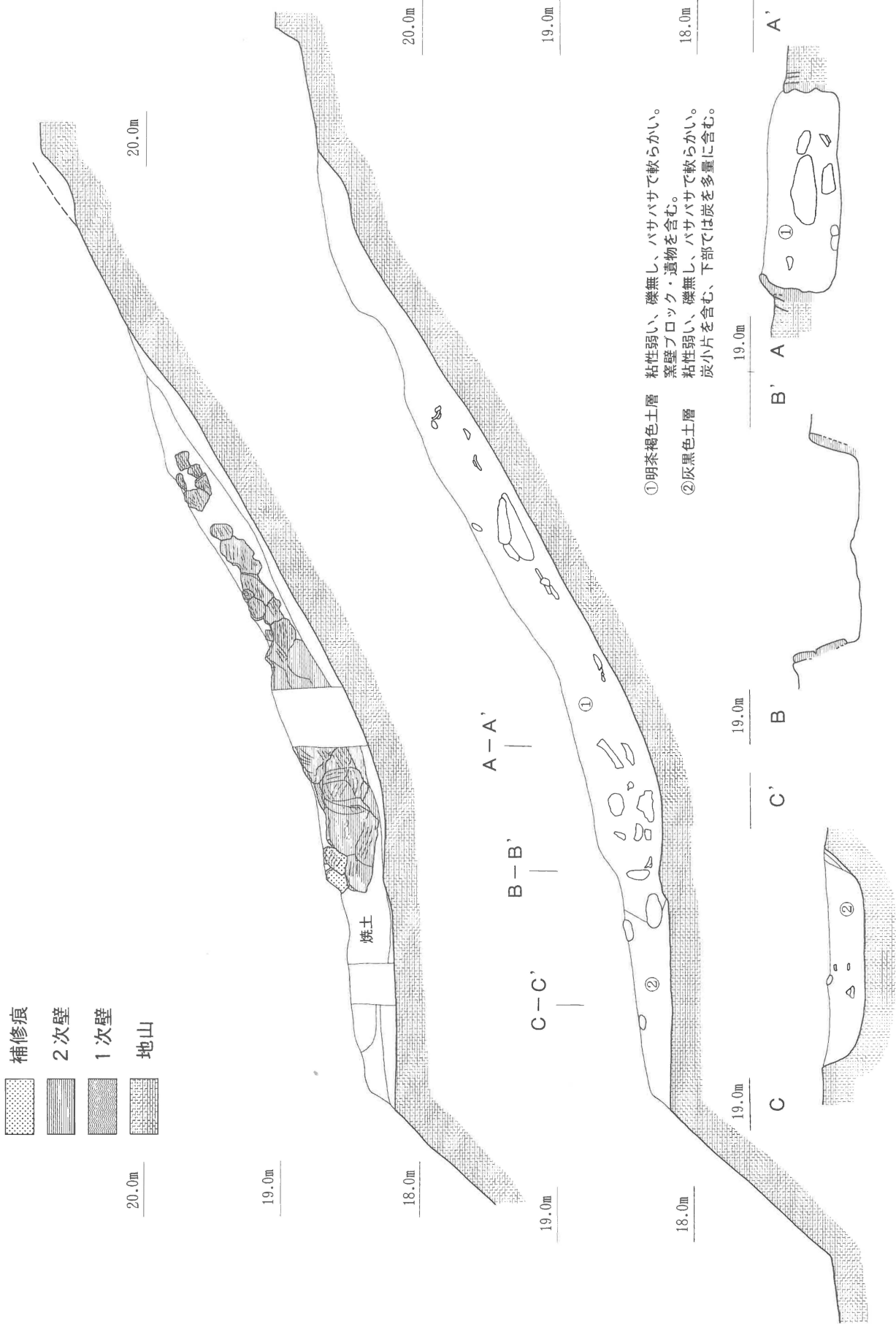
第8図 4号窯発掘区全体図 (1/200)



第9図 4号窯全体図 (1/50)



第10図 4号窯窯壁・床面状況図 (1/50)



第11図 4号窯窯壁・断面図 (1/50)

奥に行ったところで156cmである。焼成部も燃焼部もほとんど幅が変わらず、くびれた部分もなく寸胴である。主軸方向はN-178°-Wである。

**燃焼部** 燃焼部は分焰柱の中心から手前に166cmの長さで残っており、床面はほぼ水平であった。削り落とされた辺りでやや広がっており、燃焼部はほぼ残っているものと考えられる。両側壁は地山が赤く焼けており、粘土を貼り付けた壁は残っていなかった。

**分焰柱** 分焰柱はほとんど痕跡だけであるが、直径約40cmで中心部は直径約10cm程炭化しており、木質があったことが推定される。

**焼成部** 焼成部は分焰柱の中心から奥に476cmの長さで残っており、床面の角度は30°である。床面は平らで貼り床は分焰柱の中心から50cmほど奥から土層観察用のベルトまで残っているが、その他の部分は赤化した地山である。右側壁は分焰柱より奥に約2m、左側壁は分焰柱より奥に約3m程の部分にスサ入り粘土が厚く残っていた。側壁は観察できる部分はほとんど1枚であったが、左側壁の傾斜変換点付近で1ヶ所2重になっているところがあり、2枚であった可能性が考えられたので、この部分を1次壁、他の部分を2次壁とした。これ以外には、2次壁の一部に部分的にスサ入り粘土を貼り付けて補修した跡が見られ、補修痕とした。

**側壁・床** 4号窯の側壁や床の遺存状態は良好ではなかった。

## B. 灰原の構造

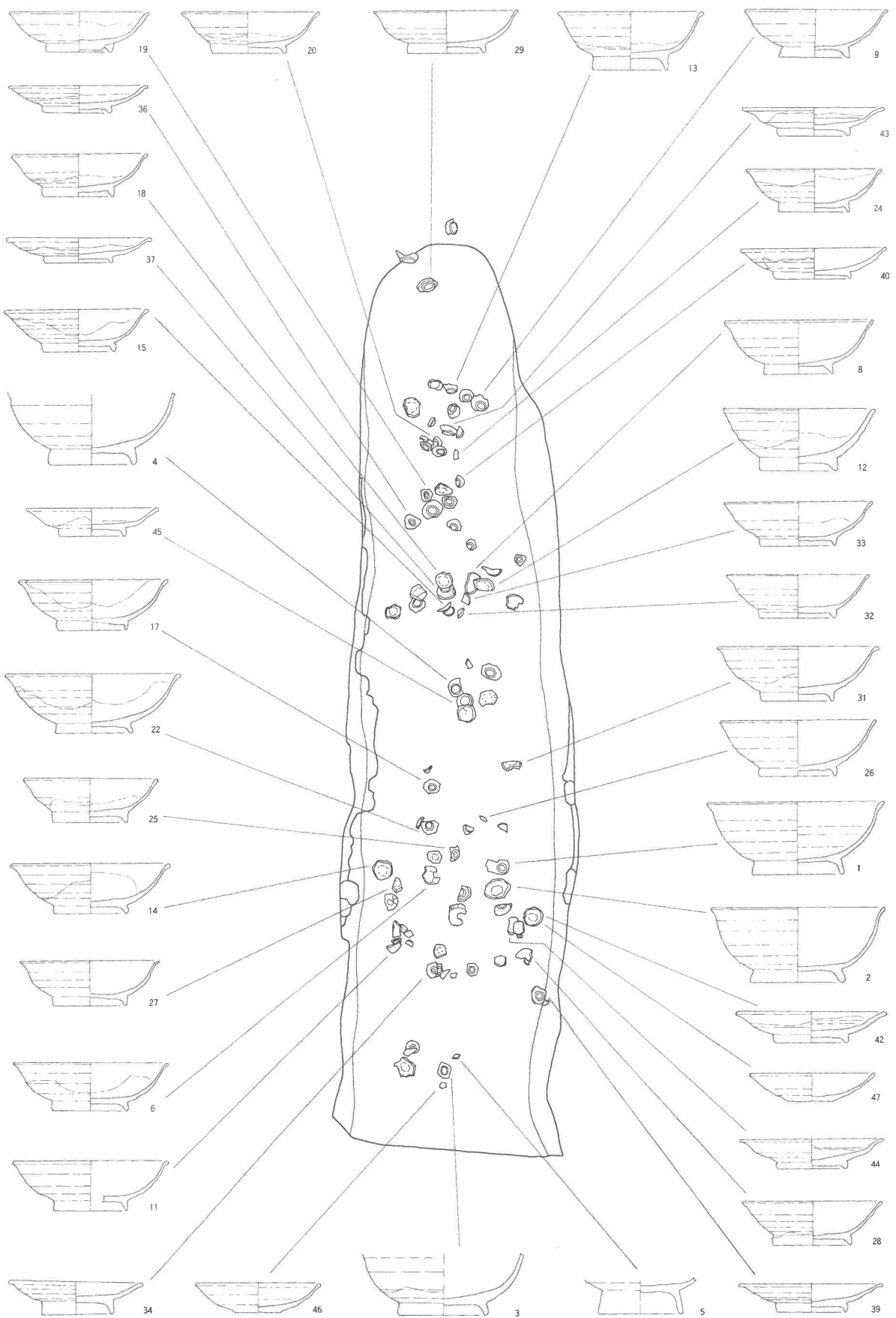
4号窯は焚口付近で大きく削られ、その先は水田になっており、灰原はほとんど残っていなかった。

## C. 遺物出土状況

4号窯は灰原がほとんど削平を受けていたため、遺物の多くは窯体内から出土したものである（窯体内出土遺物については第6・7表の遺構欄を参照）。窯体内の遺物は落下した天井の一部と考えられる窯壁ブロックの中に挟まれるようにして出土したものもあり、この下の最終操業時の床面からは残存率の高い個体が多く出土しているが、窯詰めの現位置を保っていると推定できる資料はなかった（第12図）。

窯体内出土遺物は灰釉陶器の碗・深碗・皿・段皿・稜皿、須恵器の坏であり、食膳具の碗・皿類ばかりである。壺類は平瓶と長頸壺が出土しているが、いずれも表土層からの出土であり、窯体内からは出土していない。

窯体内出土遺物は4号窯の最終操業時に廃棄されたものである可能性は高いが、窯詰めの状態を保っているものはない。出土状況からは、最終操業時以前の遺物が混入する可能性を完全には否定できない。



第12図 4号窯窯体内遺物出土状況 (1/40)



## 2. 5号窯

### A. 窯体の構造（第17～19図）

苗畑5号窯は4号窯の西約100mに位置している。標高は煙りだし付近で約20mである。調査は1993年度に窯体と灰原部分の試掘、1994年度に灰原の発掘調査を行った。窯体部分は工事計画を一部変更して現地で保存することになったので、断ち割りを行わず土層観察用のベルトを残したまま、砂を詰めた土納袋で埋め戻した。

窯体は前庭部から煙りだしまで良好に残存しており、天井部の一部や分焰柱の痕跡も残存していた。現状の残存長（A-A'ライン）は867cm、高さは焼成部中央付近で残存していた天井部までが93cm（F-F'ライン）である。幅は分焰柱のところ（I-I'ライン）で110cm、最大幅は分焰柱から170cm程奥に行ったところ（H-H'ライン）で112cmである（第19図）。焼成部も燃焼部もほとんど幅が変わらず、くびれた部分もなく寸胴である。主軸方向はN-155°-Eである。

**燃焼部** 燃焼部は分焰柱の中心から手前に165cmの長さで残っており、床面は焚口から分焰柱に向かって9°の角度で低くなっている。両側壁は地山が赤く焼けており、粘土を貼り付けた壁は一部が残っていた。

**分焰柱** 分焰柱は直径約35cm、高さ約20cmが残っており、地山を削り残した部分と考えられ、上部はスサ入り粘土で構築されていたものと考えられる。

**焼成部** 焼成部は分焰柱の中心から奥壁までの長さが687cmであり、分焰柱から約1m奥に入った辺りが最も低く、そこから徐々に立ち上がり、焼成部の後半では床面の角度は30°で直線的に延びている。床面は平らで貼り床は分焰柱の中心から約50cmほど奥から一部欠損した部分はあるが良好に残存しており、分焰柱から土層観察用のベルトまでの間は硬く焼け締まって一部には降灰が見られる。

**側壁** 両側壁は非常に残りが良く、左右ともに3枚の壁（1～3次壁）が確認できた。各壁はスサ入り粘土を厚く貼り付けており、表面には指の跡が残っている。また、3次壁には部分的に粘土を貼り付けて補修した跡（3次壁の補修）が数カ所で確認でき、色が異なったり、降灰の厚さに違いが見られる。これは壁全体を作り直す大がかりな改修作業は3回であるが、その間には数回の補修が行われたことを示しており、かなりの回数の焼成が行われたことが推定できる。また、分焰柱付近の側壁は平坦ではなく、うねって内側に一部が飛び出した形をしていた（第19図窯体水平断面図）。これは火の廻りを調整するためのものである可能性がある。

**煙出し** 煙出しは下半部が残存していた。奥壁は68°の角度で立ち上がっており、平面形は弧状にやや膨らんでいる。高さは約40cmが残っており、この上に煙出しが続いたと考えられる。

### B. 窯体構築の方法

5号窯は窯体部分の断ち割り調査を行っていないため、地山との関係が不明な点がある。周辺地形や灰原の地山等から判断する限り、地山を大きく掘り込んだような形跡はなく、斜面を溝状に掘り込んだ後に各部分を構築していったと考えられる。天井部が残っているF-F'断面では、断面の中程

崩れ落ちたことを示している。天井部は地山内に構築されているようにも見えるが、焼成部上半の側壁は明らかに天井部が旧地表面よりも上にあったことを示しており、基本的には天井部を築造した後、地山質の土で覆われたものと考えられる。

また、焚口から分焰柱に向かって低くなっており、窯跡の最も低いところが分焰柱から約1mのところにあるのは、窯の構築された斜面が約 $12^{\circ}$ という、かなり緩傾斜であったために、焼成部の床面を約 $30^{\circ}$ の角度にするためのものと考えられる。

側壁の断面が観察できる場所では、側壁の外側は黄色から赤色に焼けた地山であり、裏込め土のようなものは観察できず、掘り込んだ地山に直接スサ入り粘土を貼り付けていると考えられる。また、側壁は最下部が床面上に張り出すようなところも観察でき、床面構築後に側壁が構築されたことを示している。

以上のような観察結果から、5号窯の窯体は地山を掘り込んで構築した溝に床面を構築し、その後両側壁及び天井部を構築していったと考えられる。煙出しの上半部は旧地表面よりも高いと考えられるところから、煙出しは天井部を構築する際に土盛りをされて造られたものと推定できる。

#### C. 灰原の構造（第13・14・15図）

灰原 灰原は焚口付近を中心に、南北約12m、東西約18mの範囲に残っていた。最も厚く堆積していたのは、焚口左側のD-15区辺りであり（第13・14図）、周辺より高くなっていた。この辺りは地山面がほとんど水平であり、焚口から掻き出された灰や遺物がうず高く堆積したものと考えられる。灰層は斜面の上部では薄くなり、傾斜変換点辺りが最も厚く盛り上がり、下に行くに従って徐々に薄くなっており、東側の一部を除いて、全体としては大きな改変は受けていないように思われる。

灰層自体は黒色土で分層は不可能であった。また、窯壁ブロックも僅かであり、層を構成することもなく、窯壁ブロックのつながりから灰層内に一定の面を推定することもできなかった。

SK-1（第16図） SK-1はB-16区～G-16区辺りに掘られた長軸約8m、短軸約3m程の土壌であり、北西側は斜面になって落ち込んでいる。F・G-16区では北側の面がオーバーハングしており、粘土採掘用の土壌であったと考えられる。また、北西に落ち込む斜面にも灰層が堆積しており、この斜面が後に削られて造られたものではなく、窯跡築造当時から存在したものであることが推定できる。

出土遺物は②黒色土層（灰層）部分（第14図）と同じように出土しており、土層も灰層と分層することは不可能であった。

SK-2（第16図） SK-2はB-16区辺りに掘られた長軸約3m、短軸2.5m以上の土壌であり、東側は既に削平を受けていた。西側の面はオーバーハングしており、SK-1と同様に粘土採掘用の土壌であったと考えられる。

出土遺物は②黒色土層（灰層）部分（第14図）と同じように出土しており、土層も灰層と分層することは不可能であった。

#### D. 灰原の形成過程

灰原はほぼ地山面の直上に形成されており、窯の操業にあたって表土層の除去等の一定の造成が行われた可能性がある。窯体築造時の地山は焚口付近を境にこれより上の斜面は約12°の角度であり、かなり傾斜は緩い。また、焚口付近よりも下側ではほとんど水平であり、焚口右側ではやや下がっている（第13・14・15図）。灰原は焚口の両側でそれぞれ中央付近が高くなっており、操業に伴ってある程度継続的に焚口の両側に灰や焼成失敗品等の廃棄物が廃棄されていったと考えられる。

以上の観察結果から、窯体の溝を掘り抜いた後、灰原周辺の表土層を除去し、SK-1・2から窯体構築用の粘土を採取して窯体を構築したものと考えられる。灰原はこの後、継続的に廃棄が行われたと考えられる。

#### E. 遺物出土状況

5号窯は灰原が良好に残存し、多量の遺物が出土した。窯体内からは、床面近くや落下した天井等の窯壁に挟まれるように遺物が出土している（窯体内出土遺物については第6・7表土器観察表の遺構欄を参照）。

窯体内 窯体内の遺物は最終操業時の床面には小破片が残存していたに過ぎず、窯詰めの現位置を保っていると推定できる資料はなかった。窯体内出土遺物の多くは床面近くから出土しているが、窯壁等に挟まれ床面から浮いているものも多く、一定のレベル差を持っている。これらは最終操業以後に窯体内に持ち込まれたものであり、廃棄されたものである。また、床面に融着している遺物もあり、焼台として使用されていたものが含まれている可能性がある。出土状況からは、すべてを最終操業時の製品の残りと断定する事はできない（第20図）。

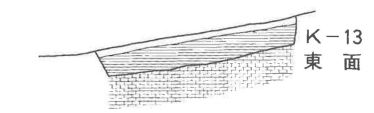
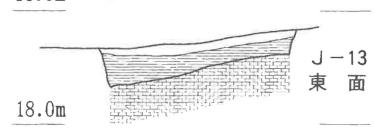
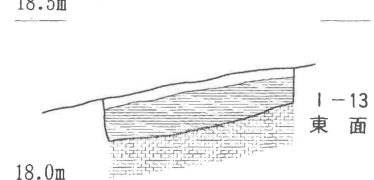
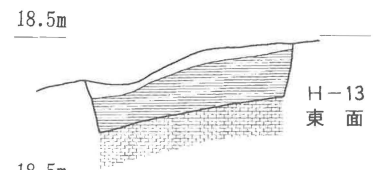
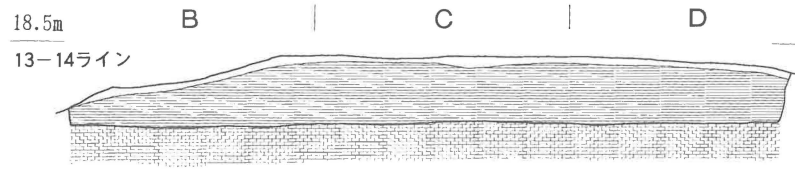
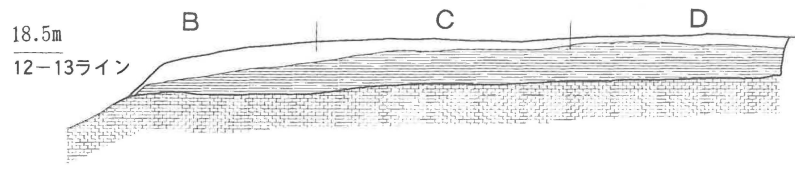
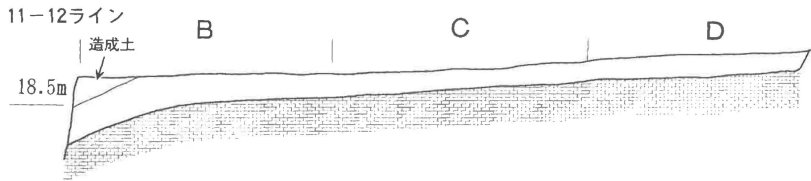
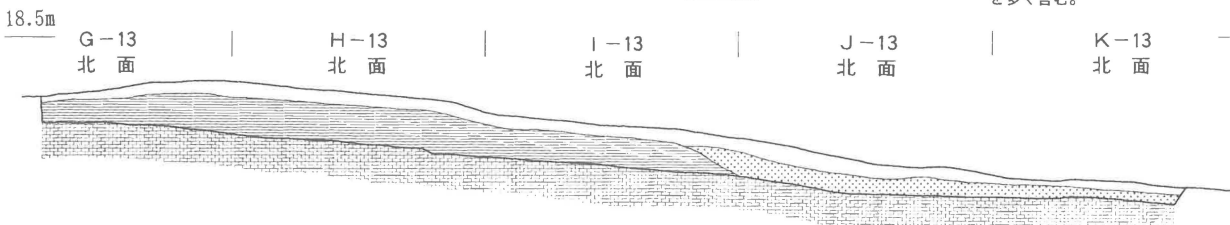
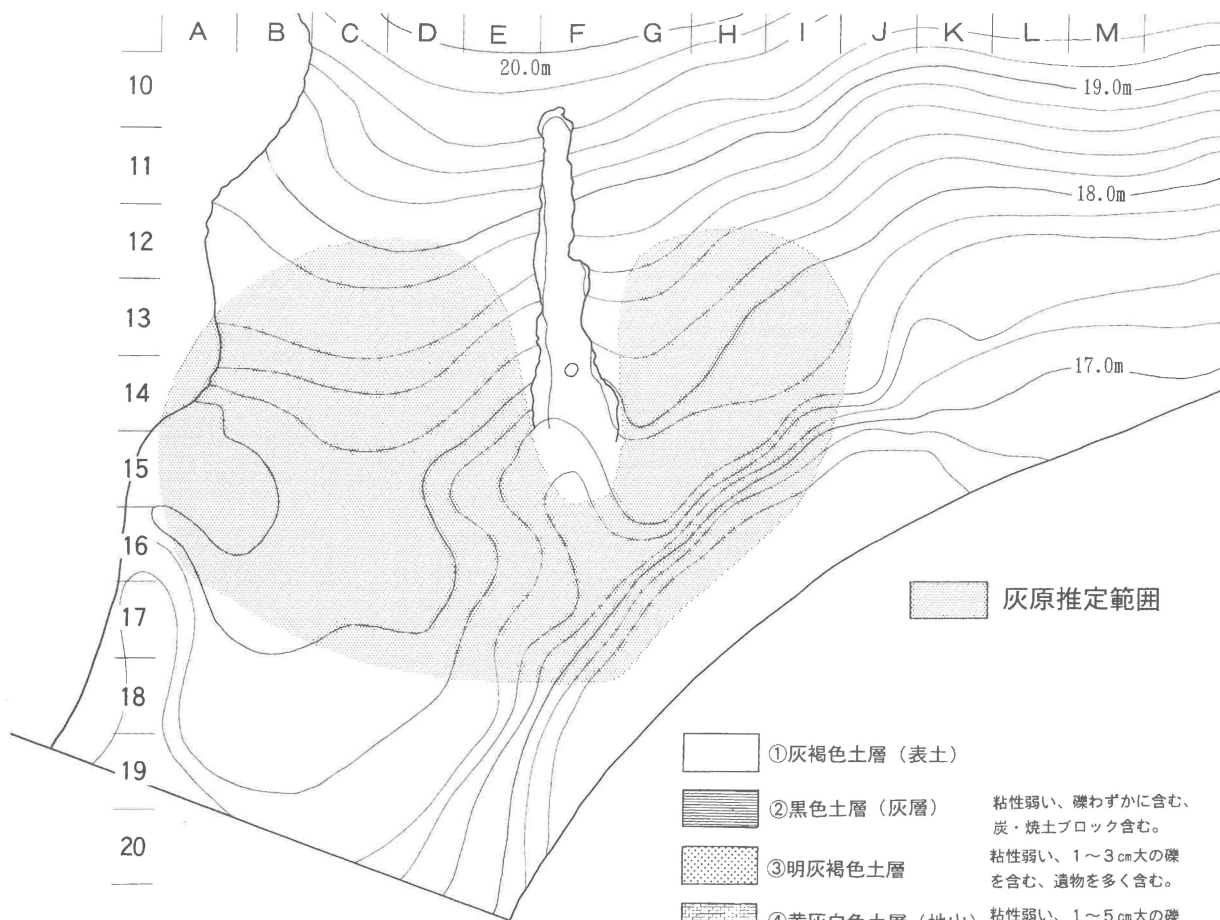
出土の平面的な位置関係は分焰柱から焚口方向に向かう右側壁側、そして焼成部下半と上半に集中しているよう見えるが、焼成部中央は土層観察用のベルトがあり、発掘を行っていないので、焼成部はほぼ全面に渡って同じような出土状況と推定できる。

窯体内出土遺物は、遺物取り上げ番号の集計によると258点が確認できる。内訳は、灰釉陶器の碗（148点）、深碗（2点）、大碗（1点）、蓋（5点）、皿（7点）、短頸壺（5点）、長頸壺（67点）、土製品（1点）、須恵器の坏（5点）、甕（17点）である。図示できるものは碗類が多かったが、実際の出土遺物は碗類に片寄った出土をしているわけではなく、壺類・甕類等も出土している。

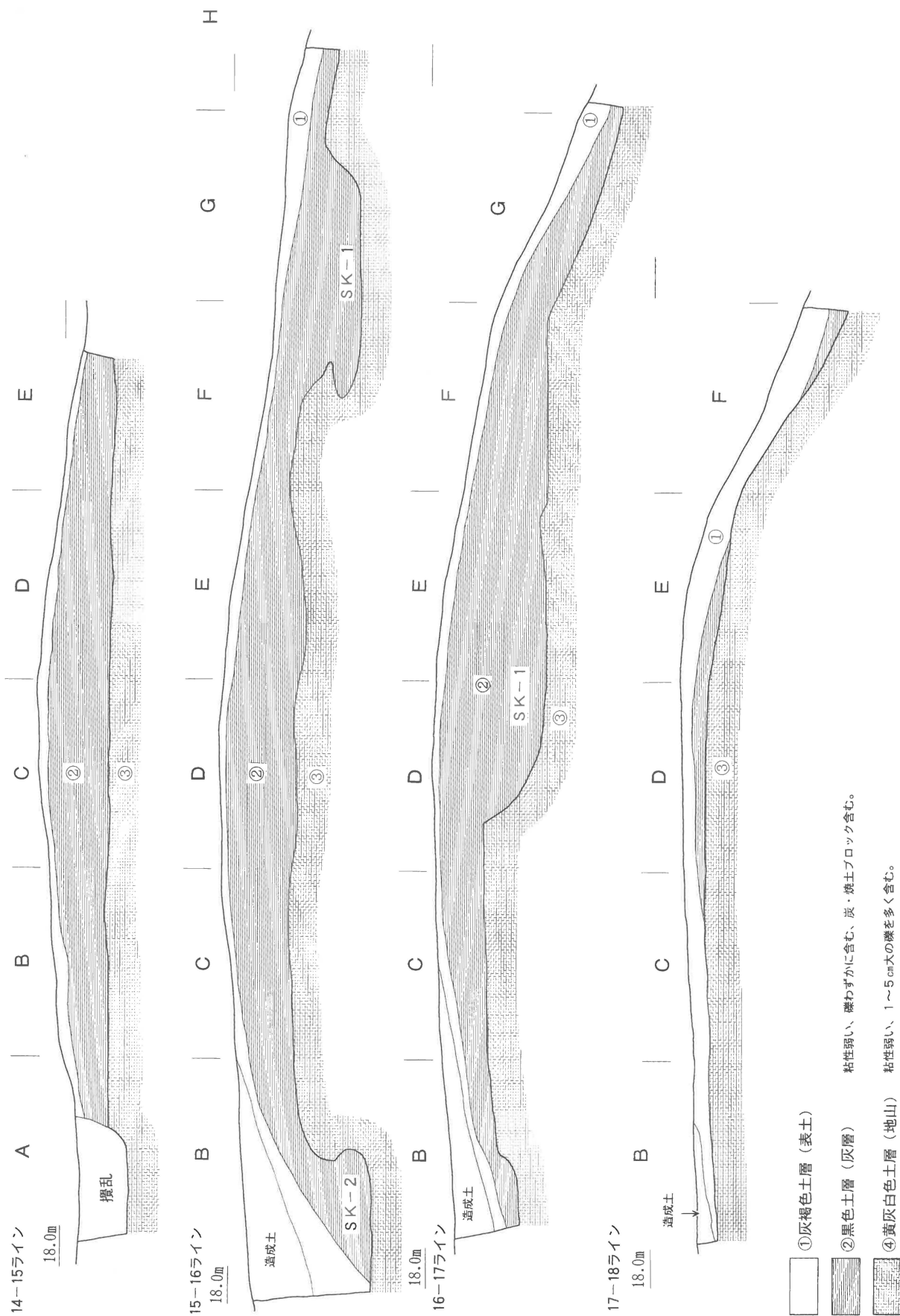
灰原 灰原出土遺物はコンテナに約100箱程度が出土している。灰原は、平成5年度と6年度の二回調査を行っている。

平成5年の調査は窯体部分と灰原の試掘であり、A～E-15区、G～K-13区（第18図）の灰原の試掘を行った。遺物は1/10の出土図を作成して、番号を付けて取り上げた。遺物の出土位置に関しては、調査後デジタイザーで3次元データに変換し、平成6年度調査分と合わせて通し番号を付け、一括して管理できるようにした。

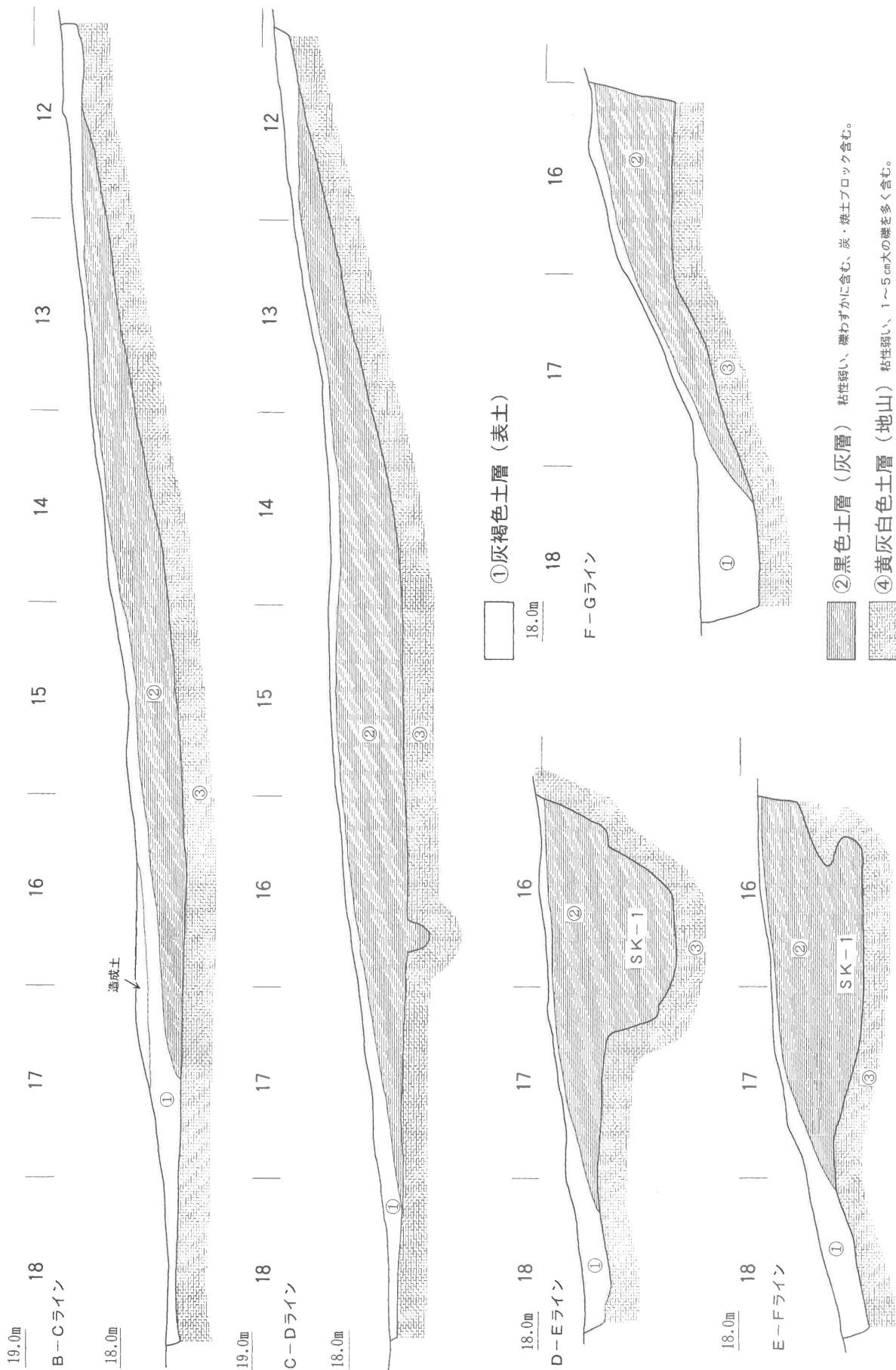
平成6年の調査はA～D-12～15区、B～G-16～18区（第13図）の調査を行った。遺物は型式学



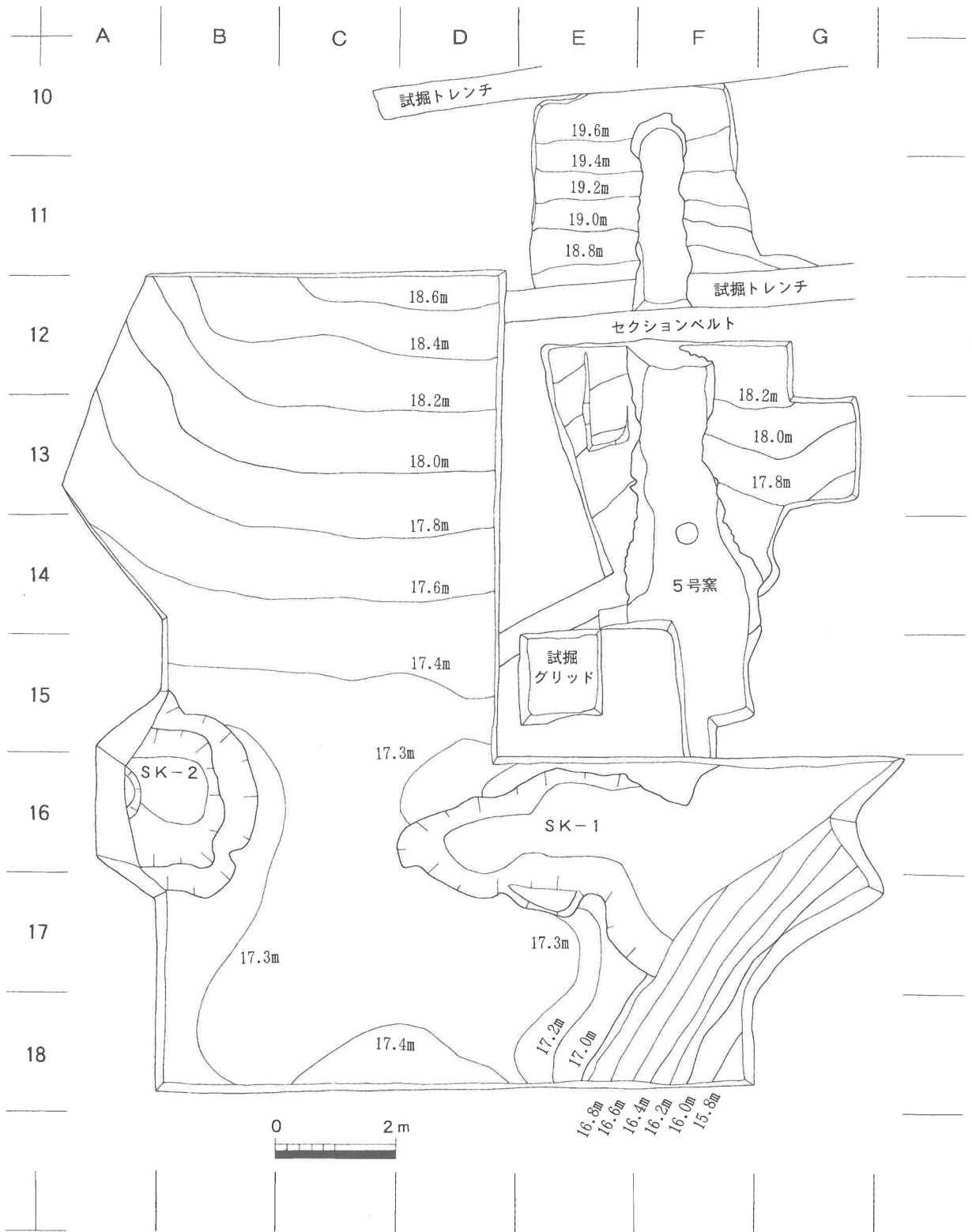
第13図 5号窠灰原断面図-1 (1/200・1/60)



第14図 5号窯灰原断面図-2 (1/60)



第15図 5号窯灰原断面図-3 (1/60)



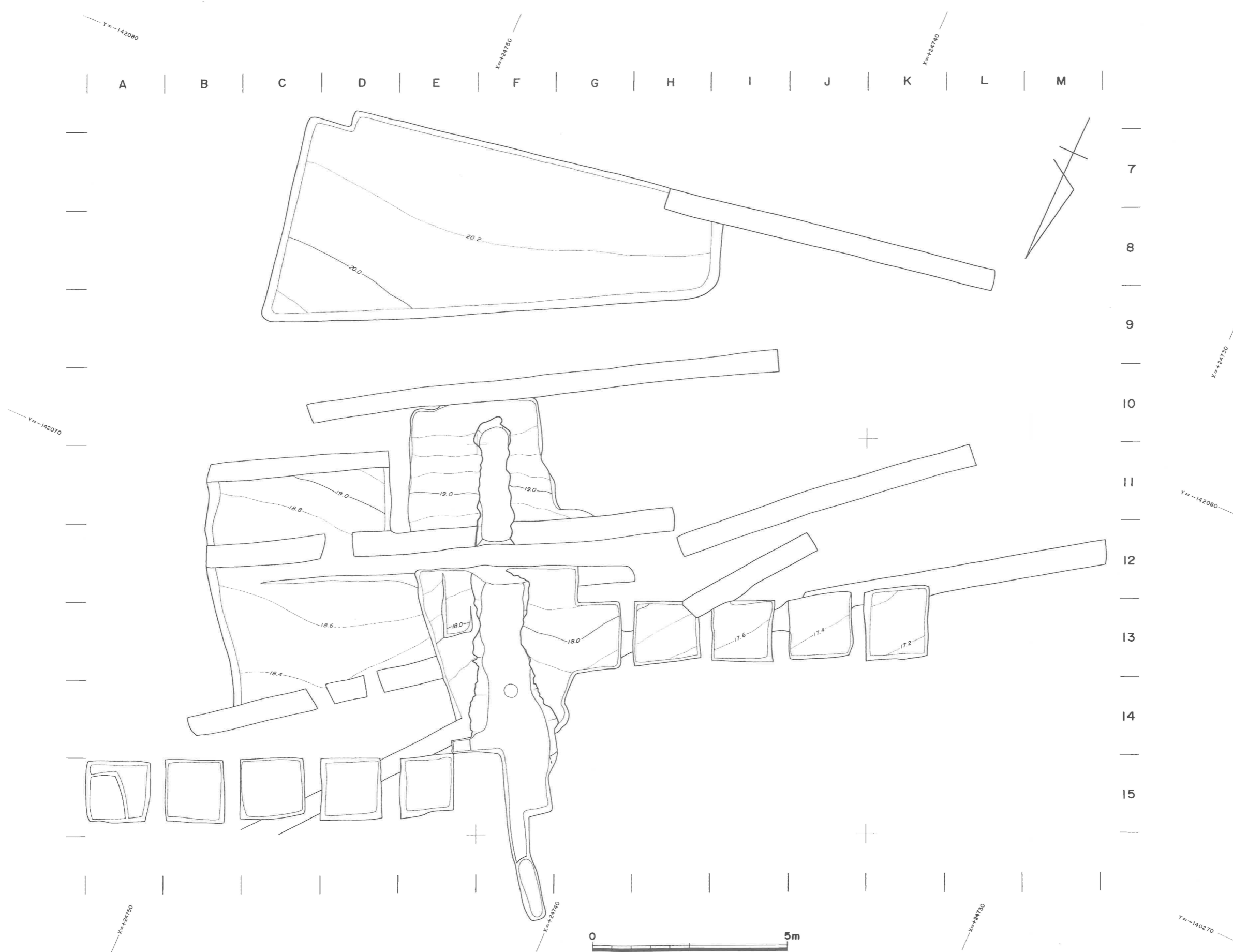
第16図 5号窯灰原完掘図 (1/100)



第17图 5号窠周边地形图 (1/200)

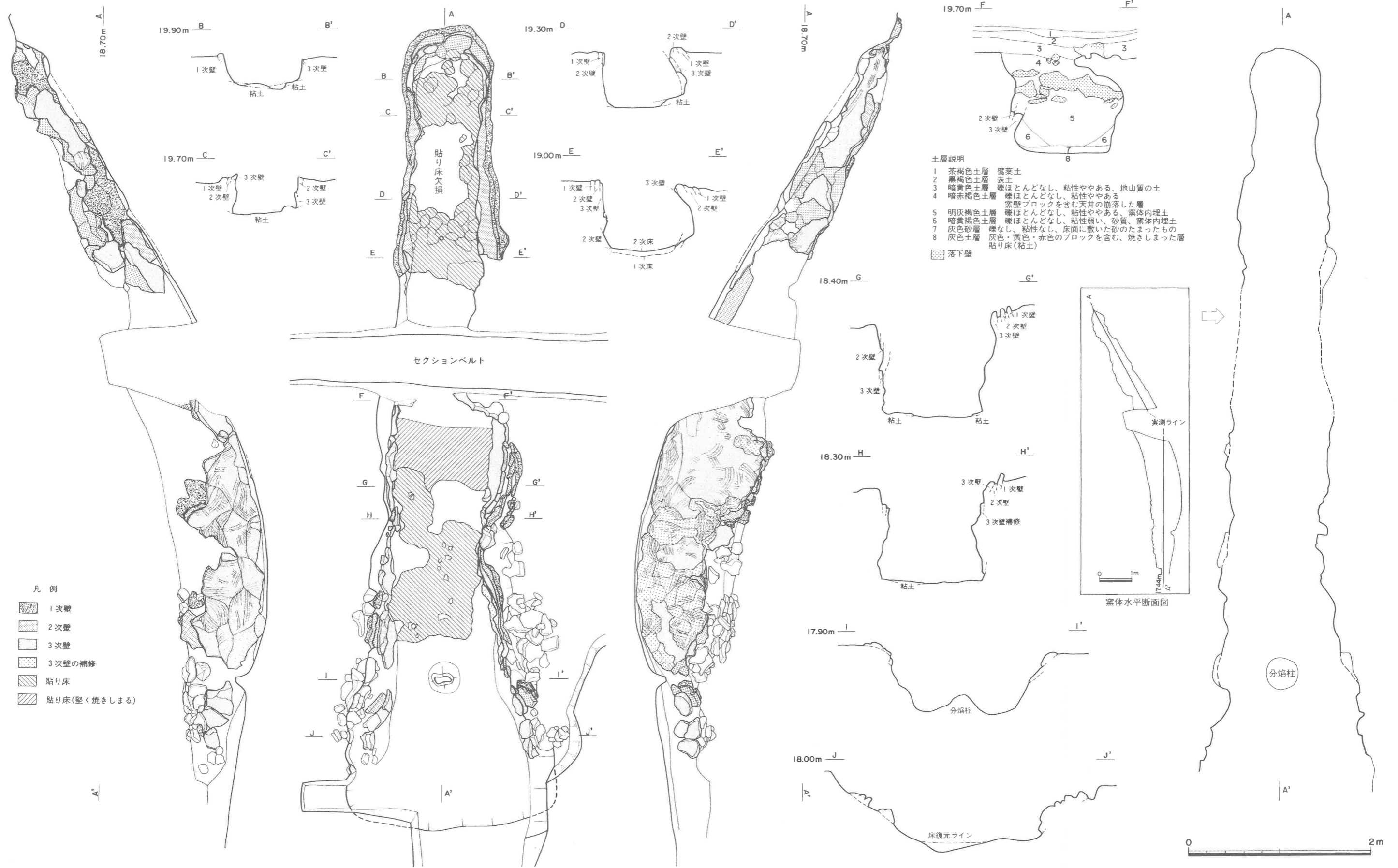






第18図 5号窯調査区位置図 (1/100)



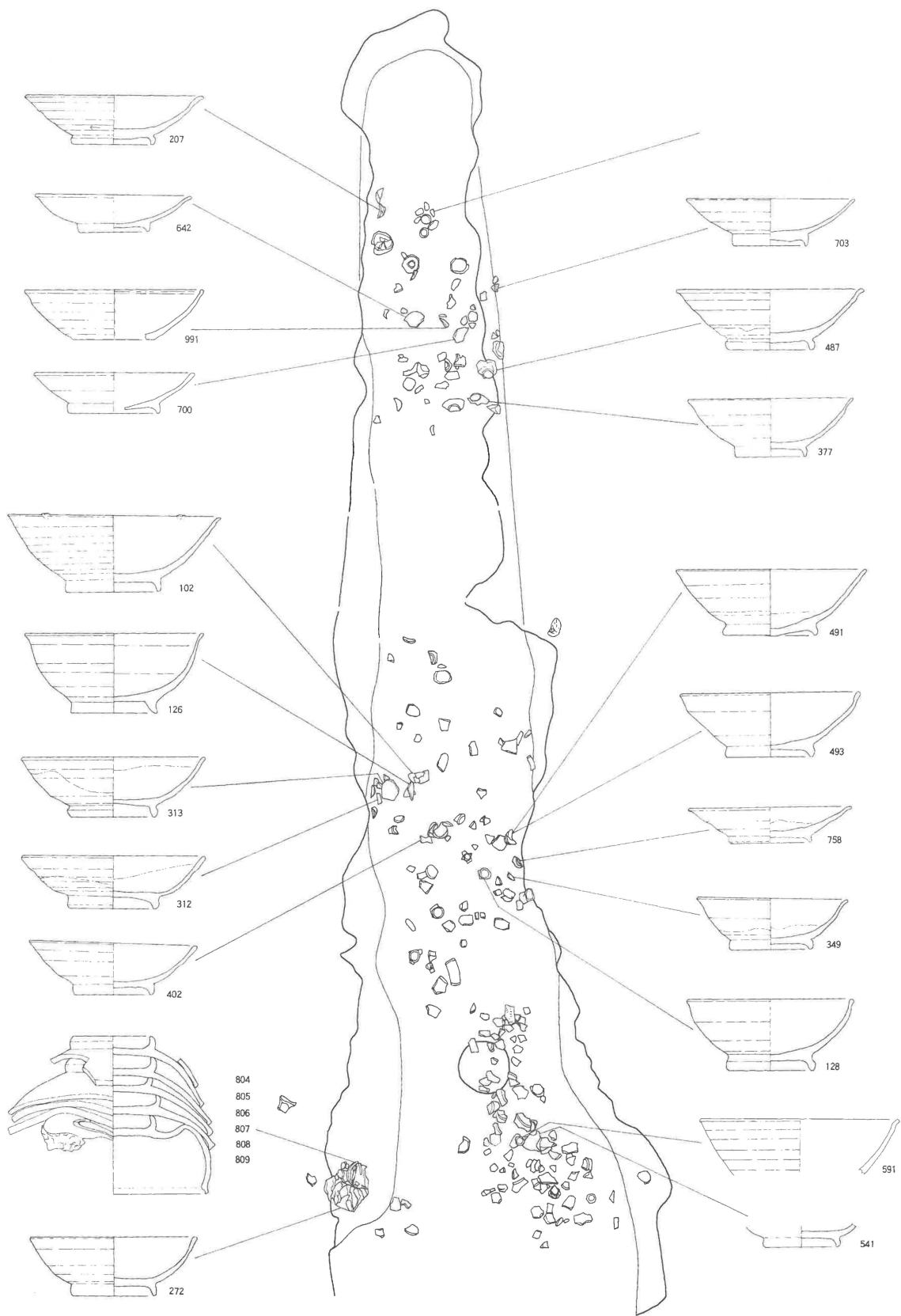


- 土層説明
- 1 茶褐色土層 腐葉土
  - 2 黒褐色土層 表土
  - 3 暗黄色土層 礫ほとんどなし、粘性ややある、地山質の土
  - 4 暗赤褐色土層 礫ほとんどなし、粘性ややある
  - 5 明灰褐色土層 窯壁ブロックを含む天井の崩落した層
  - 6 暗黄褐色土層 礫ほとんどなし、粘性ややある、窯体内埋土
  - 7 暗黄色土層 礫ほとんどなし、粘性弱い、砂質、窯体内埋土
  - 8 灰色砂層 礫なし、床面に敷いた砂のたまったもの
  - 9 灰色土層 灰色・黄色・赤色のブロックを含む、焼きしまった層
- 落下壁  
■ 貼り床(粘土)  
■ 貼り床(堅く焼きしまる)

- 凡例
- 1次壁
  - 2次壁
  - 3次壁
  - 3次壁の補修
  - 貼り床
  - 貼り床(堅く焼きしまる)

第19図 5号窯平面図 (1/40)





第20図 5号窯窯体内遺物出土状況 (1/40)

的に分類できる程度の大きさの破片（10×10cm程度）をトータルステーションで通し番号を付けて取り上げを行った。平成5・6年度で3次元データで出土位置を管理した遺物の総計は約6,500点である。

これらの遺物の詳しい分析はまだ十分に進んでおらず、他の窯跡の出土状況の分析等と合わせて、第3分冊『二川古窯址群（Ⅲ）』で報告する予定である。

### 3. 6号窯

#### A. 窯体の構造（第21～23図）

苗畑6号窯は4号窯の西約20mに位置している。標高は煙りだし付近で約20.5mである。

窯体は前庭部から煙りだし付近まで比較的良好に残存していたが、分焰柱の痕跡は確認できなかった。現状の残存長（A-A'ライン）は652cm、高さは傾斜変換点付近で残存していた側壁までが79cm（D-D'ライン）である。幅は最も手前の焚口付近と考えられるところで約150cm、焼成部中央付近で約110cmである。焼成部はほとんど幅が変わらず寸胴で、燃焼部は焚口に向かって広がる形をしている。主軸方向はN-175°-Wである。

**燃焼部** 燃焼部は傾斜変換点より下の部分と考えられ、焚口までの長さが200cmである。床面はほとんど水平である。両側壁は焚口近くで赤く焼けた地山が出ているところもあるが、粘土を貼り付けた壁は比較的良好に残っていた。

**分焰柱** 分焰柱は、その痕跡も確認できなかった。

**焼成部** 焼成部は傾斜変換点から奥壁までの長さが452cmである。1・2次床の角度は下半部で33°、上半部で26°、3次床の角度は下半部で33°、上半部で18°であり、中央近くで傾斜角度が緩くなっていた。これは焼成する製品の種類によって床面の角度を変えていた可能性も考えられるが、詳細は不明である。

1次床は赤く焼け締まった赤褐色砂礫層（9層：地山）で、2次床面は青灰色に焼け締まった貼り床である。1次床と2次床は焼成部下半ではほとんど重なっていたが、焼成部上半では1次床の上に暗赤褐色土（8層）が厚いところで18cmほど入れられていた。2次床の貼り床部分は傾斜変換点を中心に一部欠損しているが約260cmほどの長さで残存していた。3次床は焼け締まっていないサラサラの灰色砂層（6層）であり、煙りだし付近から燃焼部近くまで厚いところで10cmほどが残っていた。特に断ち割り部分では3次壁が造られた後に3次床が造られたことが確認できた。

**側壁** 両側壁は比較的良好に残りが良く、左右ともに3枚の壁（1～3次壁）が確認できた（第22・23図）。各壁はスサ入り粘土を貼り付けており、表面には指の跡が残っていたが、5号窯で確認できた部分的な補修痕は十分には確認できなかった。また、第23図D-D'断面図で示した1次壁・1次床は地山が赤褐色に焼けたものであり、スサ入り粘土で構築された窯壁は残っていなかった。これは2次壁・2次床の構築にあたって古い窯壁と床が取り去られたためと考えられる。

**煙出し** 煙出し部分は残りが悪く下半部と考えられるところが残存していた。奥壁も残りが悪いが、遺存した状況からはおよそ56°の角度で立ち上がっており、平面形は弧状である。高さは約20cmが残っており、この上に煙出しが続いたと考えられ、5号窯とほぼ同様な構造と考えられる。

## B. 窯体構築の方法（第22・23図）

6号窯は周辺地形や灰原の地山等から判断する限り、地山を大きく掘り込んだような形跡はなく、斜面を溝状に掘り込んだ後に各部分を構築していったと考えられる。

天井部は残っていないが、側壁は1～3次壁まで、床面も1～3次床まで確認できた。側壁の断ち割り断面（D-D'）では、1次壁は黄色から赤色に焼けた地山であり、裏込め土のようなものは観察できず、掘り込んだ地山に直接スサ入り粘土を貼り付けていると考えられる。D-D'で示した1次壁と1次床は焼けた地山部分のみが残存していたために確認できなかったが、2次壁は2次床（青灰色砂層）の上にスサ入り粘土で構築されていた。しかし、3次壁は2次床の上に構築されており、3次床はさらにその上に構築されていた。これは2次床が良好に残っていたためであろう。また、1次壁と1次床の関係もおそらく2次壁と2次床と同様な関係であったと考えられる。

焼成部の床面は下半部は33°であるが、上半部は緩くなっていた。

以上のような観察結果から、6号窯の第1次の窯体は地山を掘り込んで構築した溝に床面を構築し、その後両側壁及び天井部を構築していったと考えられる。煙出しの上半部は旧地表面よりも高いと考えられるところから、煙出しは天井部を構築する際に土盛りをされて造られたものと推定できる。第2次の窯体は第1次の窯体の窯壁や床の一部を剥がして、焼成部上半には土（8層）を入れて角度を変えて床面を構築したものと考えられ、灰原で確認された焼土・地山質の土の混じった間層（7層）はこの時に排出されたものと考えられる。第3次の窯体は、第2次の壁面の上に塗り重ねるように構築され、この後床に砂（6層）が入れられて床面が構築されたものと考えられる。

## C. 灰原の構造（第24図）

灰原 灰原は焚口より下の斜面に南北約4m、東西約3.5m以上の範囲に残っていた。東側は発掘区内でほぼ端部が確認できたが、発掘区の西壁で確認された灰層が最も厚く、さらに西側に延びていることが確認できた。南側は焚口の右側辺りから始まり、北側は傾斜変換点付近を中心に3～4mの幅で残っていた。

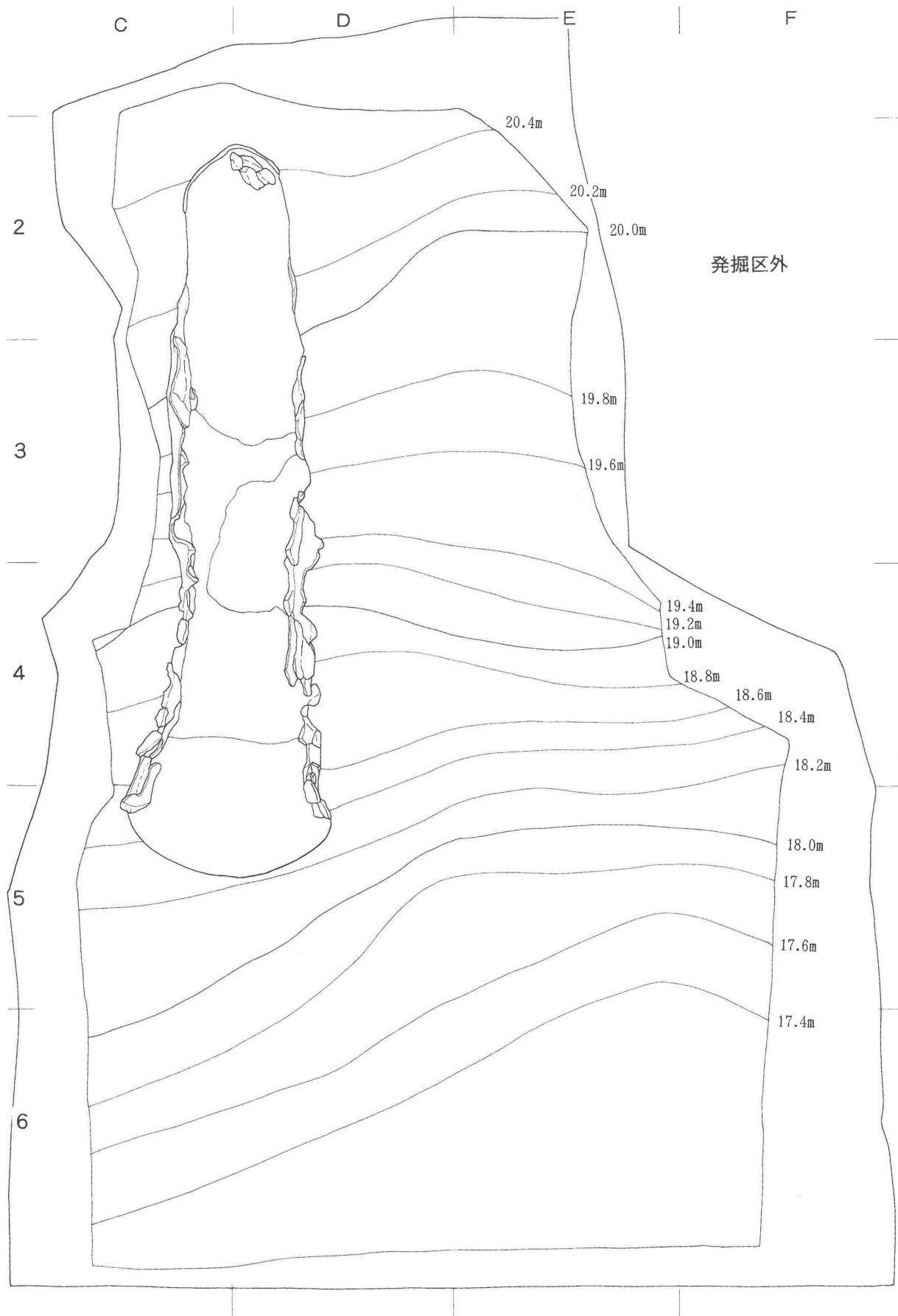
灰原は焼土・地山質の土の混じった間層（7層）を挟んで上下2層（6・8層）が確認できたが、西壁でははっきり確認できなかった。7層は窯壁を作り直した際に堆積したものと考えられる。

灰層（8層）の直下（9層）は地山質の土と灰色の土が混じったものであり、窯体構築に伴って掻きさらされたものと考えられる。9層と地山（12～15層）との間にある層は旧表土（10層）、旧表土と地山質の土が混じった層（11層）であり、旧表土と考えられる層が上に乗っているところから、自然堆積層と考えられる。

## D. 遺物出土状況（第25図）

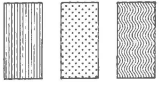
6号窯は窯体が良好に残存し少数の遺物が出土したが、窯詰めの原位置で出土したものはない。灰原は焚口付近の一部が残存していたに過ぎないが出土遺物のほとんどは灰原からの出土である。（窯体内出土遺物については第6・7表遺物観察表の遺構欄を参照）。





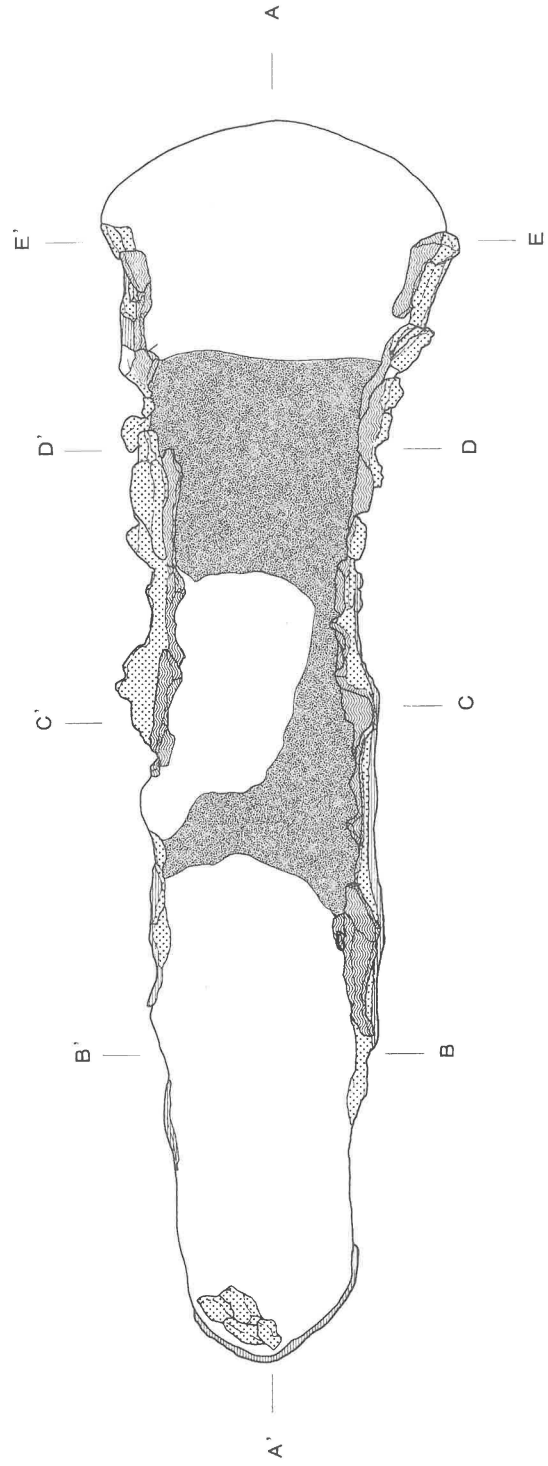
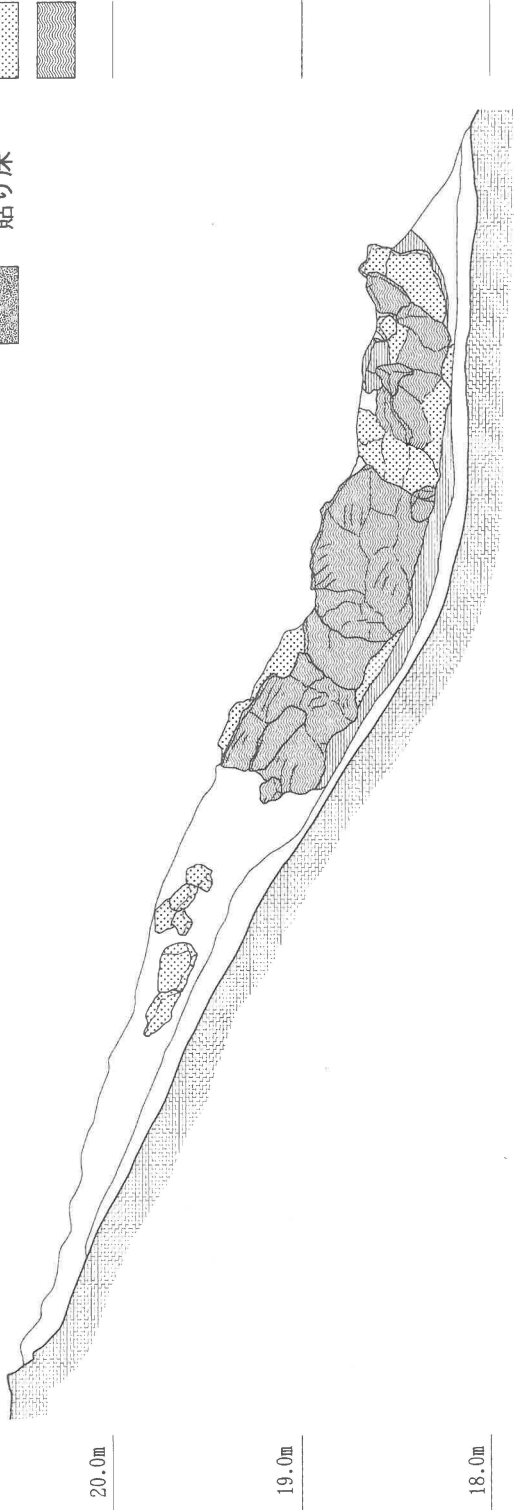
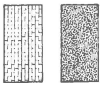
第21図 6号窠発掘区全体図 (1/50)

1次壁  
2次壁  
3次壁

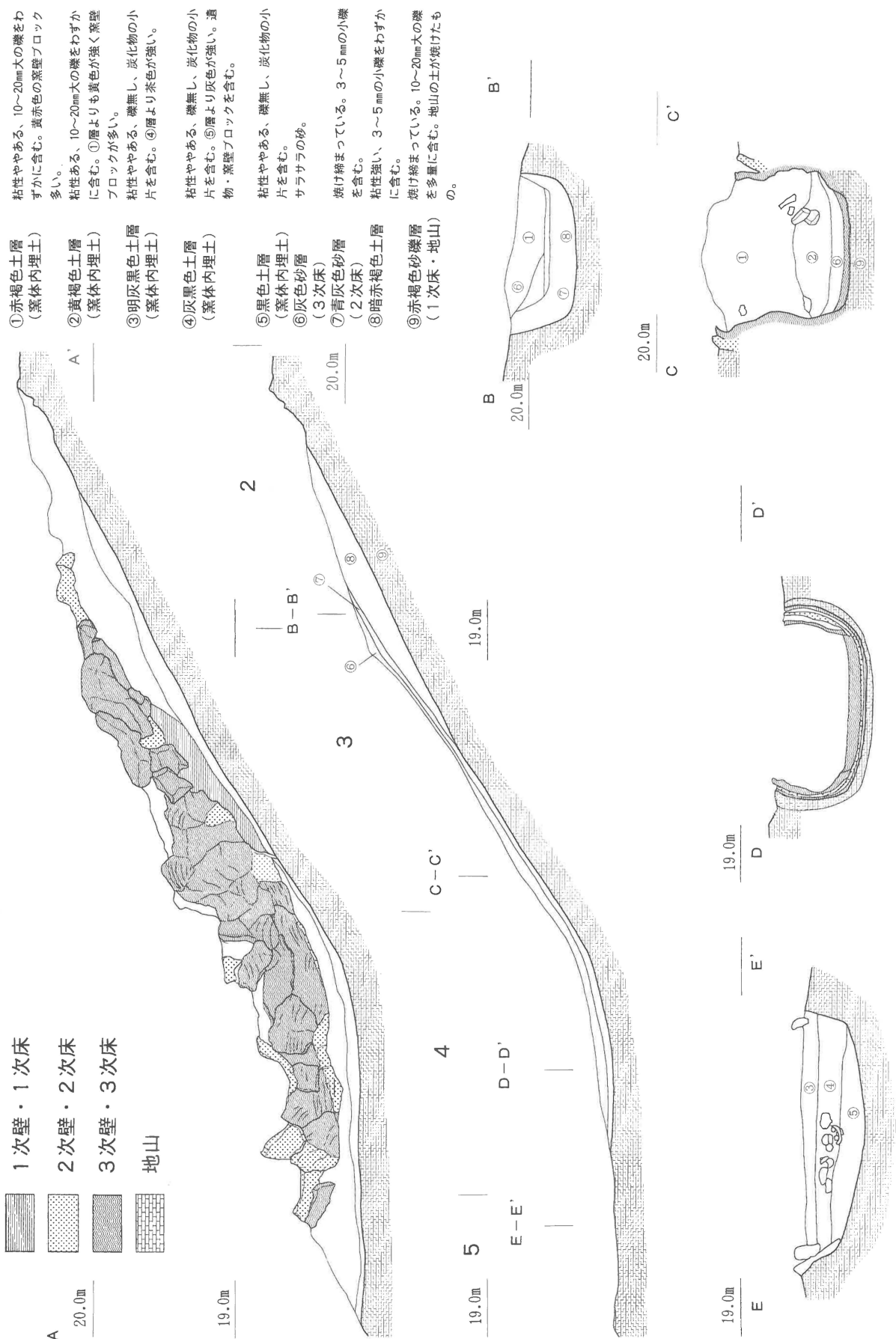


地山

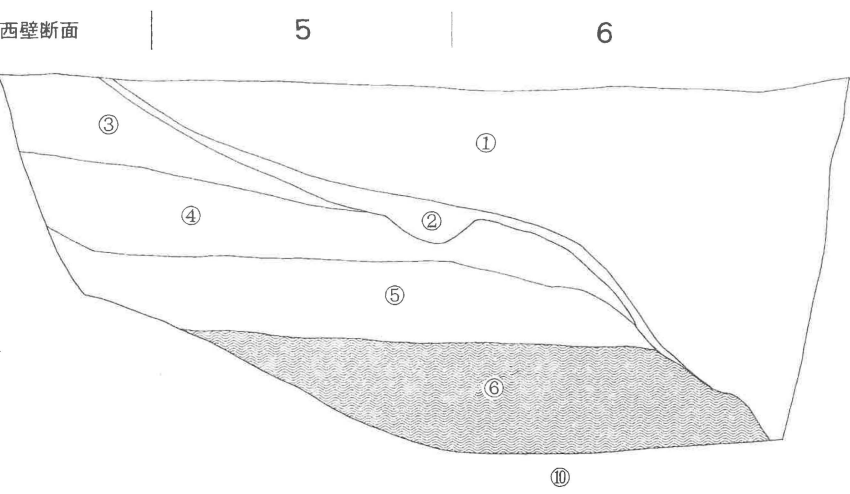
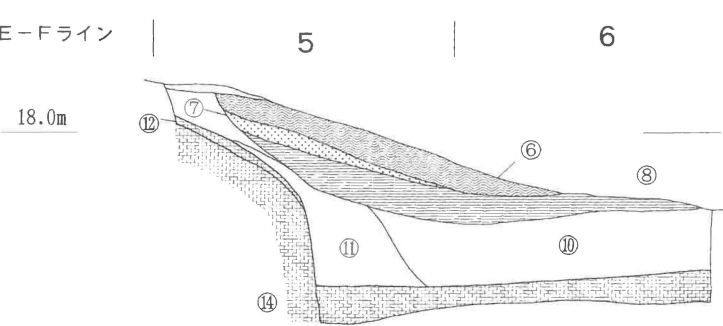
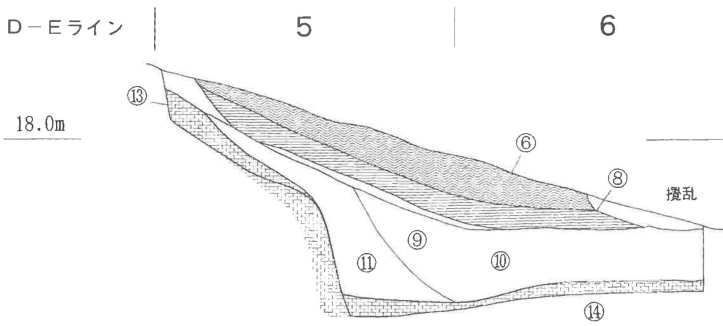
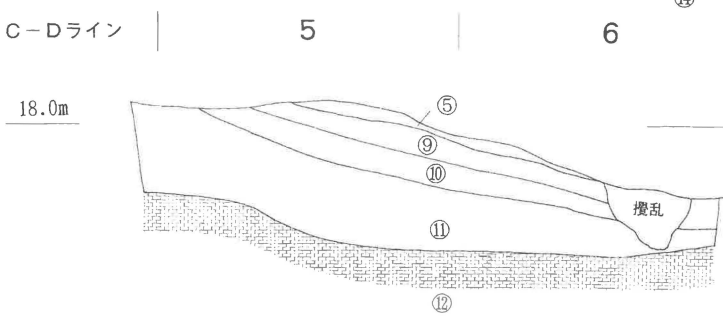
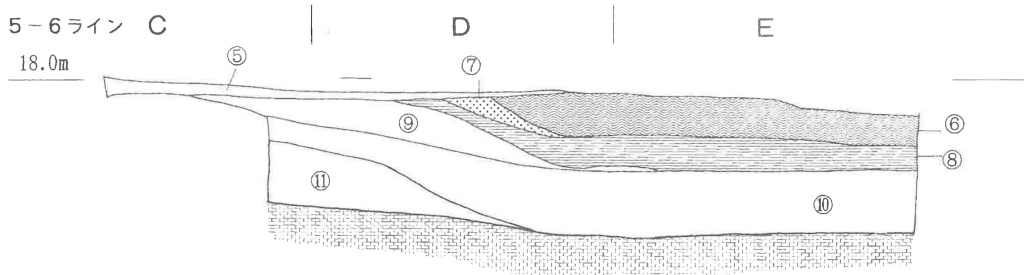
貼り床



第22図 6号窯平面図 (1/40)



第23図 6号窯側面・断面図 (1/40)



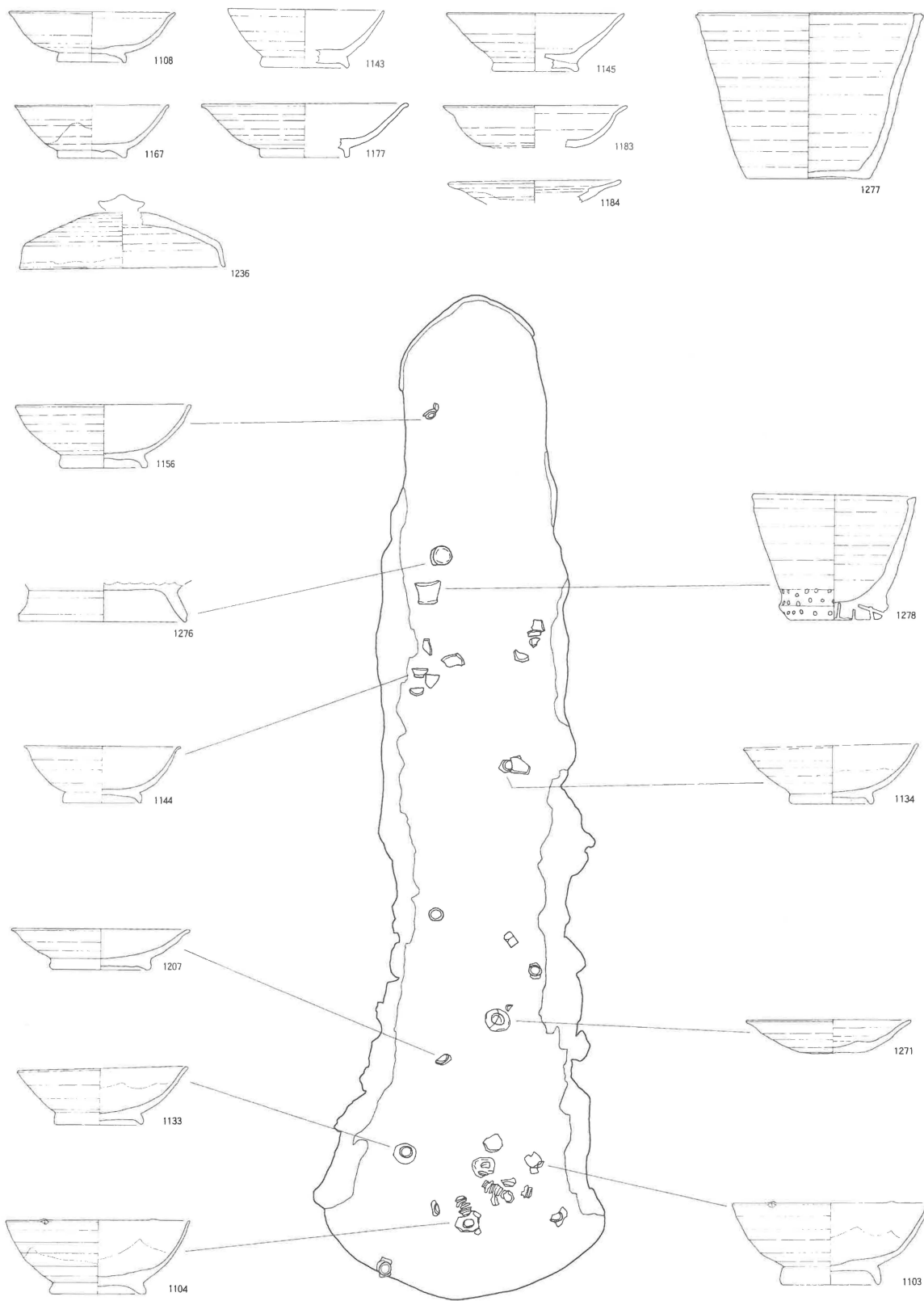
- ①黄色砂礫層 動物園の造成土。
- ②黒褐色土層 落ち葉を含む腐植土層、公園造成以前の現地表面。
- ③黄赤色土層 営林署の造成土。
- ④灰黒色土層 灰原の土の二次堆積土、遺物含む。
- ⑤黄灰色土層 営林署の造成土。
- ⑥黒色土層 粘性やや強い、灰層、窯壁ブロック、遺物、炭を含む。
- ⑦明灰黄色土層 粘性やや強い、焼土、地山質の土の混じった間層。
- ⑧暗灰黒色土層 粘性やや強い、灰層、窯壁ブロック、遺物、炭を含む。
- ⑥層より灰色が強い。
- ⑨黄灰色土層 地山質の黄色と灰色の土が混じったもの。粘性強い、10~20mm大の礫をわずかに含む。窯体構築時に掻き出した土。
- ⑩灰色土層 粘性ややある、礫無し、炭の小片混じる。
- ⑪暗黄色砂礫層 粘性弱い、10~30mm大の礫を含む。地山と旧表土の混じった土。
- ⑫黄色砂礫層 粘性弱い、10~30mm大の礫を多量に含む。地山
- ⑬明灰黄色土層 粘性ややある、礫無し。地山
- ⑭灰色砂礫層 砂質、粗い砂と5~10mmほどの小円礫を含む。

- 灰層上層
- 間層
- 灰層下層
- 地山

第24図 6号窯灰原断面図 (1/50)

窯体内 窯体内の遺物は最終操業時の床面（3次床面）上の、焚口付近と焼成部上半で少数が出土したに過ぎず、窯詰め時の現位置を保っていると推定できる資料はなかった。窯体内出土遺物の多くは最終操業以後に床面に残っていたものであり、最終操業時の製品の残りの可能性も考えられる。

灰原 灰原はD～F-5・6区に残存し、遺物は比較的良好に残存していた。遺物は型式学的に分類できる程度の大きさの破片（10×10cm程度）をトータルステーションで通し番号を付けて取り上げを行った。総数は約370点であるが、これらの遺物の出土状況の詳しい分析はまだ十分に進んでおらず、他の窯跡の出土状況の分析等と合わせて、第3分冊『二川古窯址群（Ⅲ）』で報告する予定である。



第25図 6号窯窯体内遺物出土状況 (1/40)